

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 1

2016
April

4月

花開く高校教育 次なるステージへ

特集

「第5回 学習基本調査」と現場の視点から考える

主体的な学習者の姿と その育成のあり方

新コーナー

授業を進化！ 思考を深化！

実践 アクティブ・ラーニング

数学

群馬県立伊勢崎工業高校 のぞきとたかとし 荻戸貴利

ほかにも、

新コーナー 大学Evolution がスタート！

指導変革の軌跡

岐阜県立 せなん 岐南工業高校

福岡県立 やはた 八幡高校

「破壊的」「10年は勉強」と酷評されたあの日から
わずか2年で全国大会、
そして翌年は日本一!



①俳句甲子園の地方大会初出場から3年目、初めて全国大会への切符を手に。そして翌年2015年の大会で日本一に! ②文化祭では、俳句甲子園の審査員と強豪校を招き、3つのテーマで試合を行い、2勝1敗で勝利。③さらに文化祭では、和本作りを行い古典の魅力をアピール。



④俳句の題材を求めて、名所・旧跡などにも出かける。⑤帰りの電車の中で句会を開くことも。「青春18きっぷ」を使って1日中普通電車を乗り降りし、ひたすら句会を続けるという練習を行ったこともある。

「待春や十指に包む親子丼」
全国大会で劣勢を覆した一句

愛媛県松山市で毎年開かれる「俳句甲子園(*)」。第18回大会で見事優勝を果たしたが、名古屋中学校・高校の文学部だ。俳句甲子園は5人1組のチームで参加し、事前に示されたテーマで作った句を披露しながら、相手チームの句を批評する。文学部が俳句甲子園に参加して4年目、並み居る強豪校のハートに迫る。

を退けての快挙だった。だが、全国大会に通用する作句力、鑑賞力を養うには、日々の勉強をこなしながらたくさん句を詠まなければいけない。知性と感性をハードな練習で鍛えながら、彼らはいかにして闘志を維持し続けたのか。俳句、そして文学に懸ける男子校生たちのハートに迫る。

古典研究、小説執筆、
そして俳句作り。
文学を全力で楽しむ!



⑥古書店で購入した本を調べ、論文を執筆する古書研究にも取り組む。印字、製本の状態などからどんな経緯をその本が経てきたのかを考える。⑦古書の取り扱い方も習得する。繊細な和紙が人の手の汗や脂で劣化しないよう、隅をそとつまんでページをめくる。

ハートを
こがせ!

Vol.07

愛知県・私立名古屋中学校・高校
文学部

何百もの句を詠んでは捨て、
闘志と冷静さでつかんだ
「俳句甲子園」優勝

2 特集

「第5回 学習基本調査」と現場の視点から考える

主体的な学習者の姿と
その育成のあり方

4 現状把握 相次ぐ教育改革を受けて、子どもの学びはどう変わったか

8 座談会 教育の連続性を踏まえた
「主体的な学習者」の育成のあり方を考える

福島県立福島東高校 進路指導主事 千葉 聡

高松第一高校(香川県高松市立) 進路指導主事 片山浩司

青山学院大学 教育人間科学部教授 樋田大二郎 / 埼玉県鴻巣市立吹上中学校 校長 加藤幸弘

東京都足立区立千寿小学校 校長 田村正弘 / ベネッセ教育総合研究所 副所長 木村治生

14 実践事例1 生徒・教師がオープンマインドで語り合う土壌を英語を軸につくる
大阪府立箕面高校18 実践事例2 全校体制で言語活動を取り入れ、分かる、深まる楽しさを引き出す
岡山県立岡山芳泉高校

22 ハートをこがせ!

愛知県・私立名古屋中学校・高校 文学部 17音の自由のために高校生活を大切に、ひたすらに句を詠む

24 新コーナー 授業を進化! 思考を深化! 実践 アクティブ・ラーニング

個々の学びのペースを尊重したグループ学習で、「学びの感動」が口をつく授業に
数学◎群馬県立伊勢崎工業高校 荻戸貴利

28 指導変革の軌跡

岐阜県立岐南工業高校

学力層別指導◎学力層に応じた組織的な指導で、大学進学者数を伸ばす

福岡県立八幡高校

SSHを軸とした授業改革◎教科の枠を超えて、科学的な素地を持った生徒を育てる

36 改良! 指導ツール ビフォーアフター

1年生導入期(4月から夏休み前まで) 学習計画・記録表

40 新コーナー 大学Evolution 大学が拓く新しい学び

アクティブ・ラーナーの育成を目指し、文理混合クラスでの協働学習を1年生で実施
九州大学◎基幹教育「基幹教育セミナー」「課題協学科目」

44 VIEW'S REPORT

鳥取県で「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」が開催

「故郷の未来はこの手で担う!」高校生が地方創生のアイデアについて討論

高校生が英語力、論理的思考力を競う!

県の英語教育の底上げを目指し、山梨県で初の英語ディベート大会を開催

56 Reader's VIEW

〈ビュー21〉

高校版

Volume 1

2016

April

4 月

今月の表紙メッセージ

花開く高校教育
次なるステージへ

◎2016年1月にベネッセ教育総合研究所より公表された「第5回 学習基本調査」の結果では、高校生の家庭学習時間や学習態度の大幅な改善が見られました。これは、高校教育のこれまでの改革、現場の先生方の取り組みの成果の表れの1つではないでしょうか。もちろん、調査結果からは見えない課題や先生方の実感と異なる部分も少なからずあるかもしれません。その点も踏まえ、今号の特集では、高校教育がさらなる高みに進むために求められることについて考えます。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇*本文中のプロフィールは全て取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

「第5回 学習基本調査」と現場の視点から考える

主体的な

学習者の姿と

その育成のあり方

2016年1月、ベネッセ教育総合研究所より「第5回 学習基本調査」の結果が公表された。

第1回の調査から回を重ねるごとに減少していた高校生の家庭学習時間が、今回初めて増加に転じ、さらには、学習態度や教科に対する意識も軒並み改善している。

この結果の背景にあるものは何か。そして、今求められている「主体的な学習者」を育成するために、学校や教師はどのような役割を果たしていけばよいのか。現場の実態も踏まえながら、考えていく。

Q. 最近の生徒の学習状況から、課題と感じられている点を具体的に教えてください。

◎学習習慣や学力に大きな格差が出てきており、全く学習しない層の存在に危機感を抱いている。学問の面白さ、学問が必要な理由などの発信を強める必要がある。(北海道)

◎学習量に大きな変化はないと思うが、ノートの取り方、弱点の補い方、自分に合った学習方法の工夫、志望校の現状分析などの力が弱くなったと強く感じている。ただ問題を解くのではなく、どうすれば同じ間違いを繰り返さないかを考えて学習している生徒が少な過ぎることが残念でならない。(茨城県)

◎受け身の状況は変わっていないと思う。しかし、場が与えられれば生徒は自らやれる可能性をどの層も潜在的に持っている。場の設定と指導方法の問題に尽きるのではないか。(埼玉県)

◎学習だけでなく、部活動や生徒会行事など様々な場面で、教師の介入が増え、生徒の主体性を奪っている。結果的に「学校は与えられる場所」という雰囲気が醸成される。(富山県)

◎以前に比べて真面目に取り組む生徒が少し増えたと感じているが、主体的かと言えばそうではない。これは、真面目であり、裏を返せば自由度が少ないことの弊害だろう。アクティブ・ラーニングの導入が叫ばれる理由は、まさにこれだと感じる。(愛知県)

◎丁寧過ぎる指導も問題ではないか。時間がかかっても、自立的な学習者を育てるための工夫を根気強く行う必要がある。(岡山県)

◎「学習の意義」をうまく伝えられていない。課題発見型学習ではないが、与えられる学習からの転換が不可欠だと感じている。(愛媛県)

出典／「VIEW21」高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2015年12月にウェブとファクスで実施。

本号のテーマ

「第5回 学習基本調査」の結果と現場の実態から
生徒に育むべき力とその指導のあり方を考える

「第5回 学習基本調査」の結果概要

現状把握【P.4~7】

- ◎各学校段階において、家庭学習時間が増加。その大きな要因の1つが、宿題の時間の増加
- ◎家庭学習に主体的な学習態度で臨む児童・生徒の割合が増加
- ◎教科の好き嫌いでは、どの学校段階においても、ほとんどの教科で「好き」の割合が増加
- ◎「分かりやすい授業」を望む声が減少した一方で、中学・高校では依然として「上手な勉強の仕方が分からない」の割合が高い
- ◎全ての学校段階で、授業における能動的な学習活動を「好き」と答える割合が増加。ただし、「先生が黒板を使いながら教える授業」などの従来型の授業を好む割合は依然として高い

学校教育のこれまでの改革、取り組みによって、生徒の主体性が向上

生徒の主体性をさらに育み、「主体的な学習者」へと導くために、
教師に求められる指導、役割とは？

教育の連続性を踏まえた
「主体的な学習者」の育成のあり方を考える

座談会【P.8~13】



「唯一解ではなく、最適解を追い求める学びを」
青山学院大学 教授 榎田大二郎

「分かったふりをせず、『分からない』と言える子どもを育てたい」
東京都足立区立千寿小学校 校長 田村正弘



「教師が手をかけ過ぎなければ、生徒は自分で考える」
高松第一高校（香川県高松市立）進路指導主事 片山浩司

「苦勞を乗り越える体験を通して育つ力、自信、意欲が大事」
埼玉県鴻巣市立吹上中学校 校長 加藤幸弘



「外部のリソースも活用し、生徒が成長のきっかけを得られる場をつくる」
福島県立福島東高校 進路指導主事 千葉 聡

高校における実践事例

実践事例 1

大阪府立箕面高校 【P.14~17】
生徒・教師がオープンマインドで語り合う土壌を英語を軸につくる

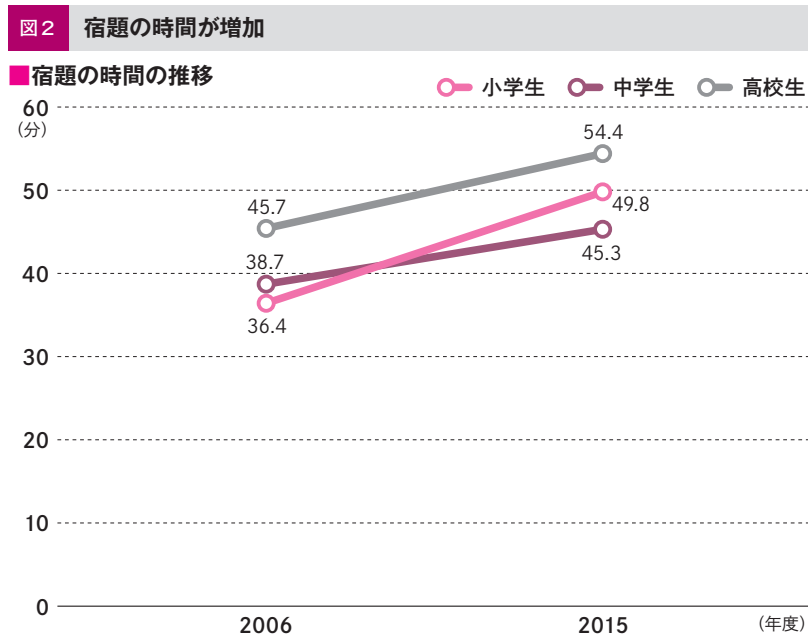
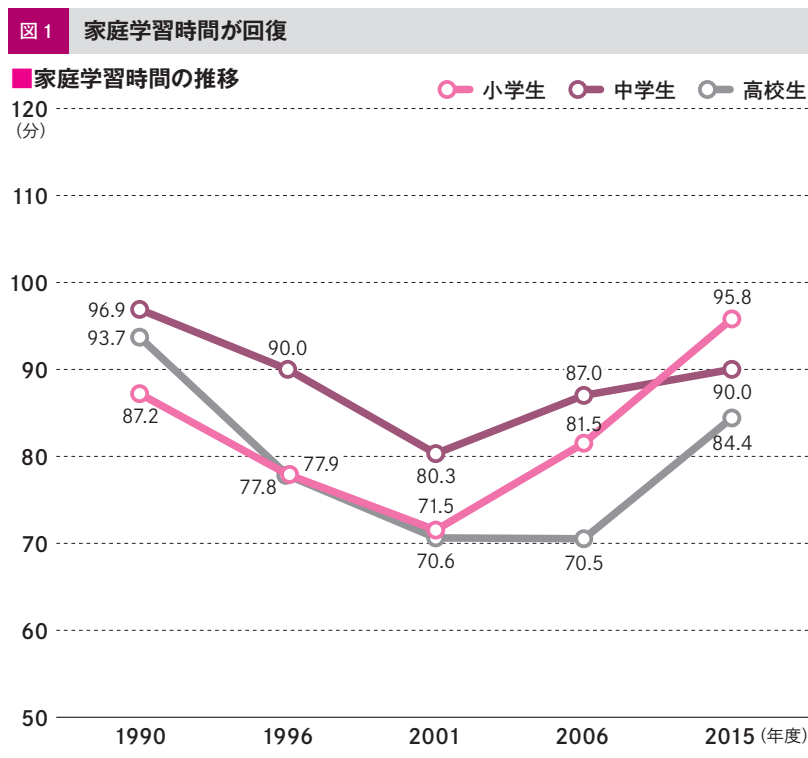
実践事例 2

岡山県立岡山芳泉高校 【P.18~21】
全校体制で言語活動を取り入れ、分かる、深まる楽しさを引き出す

現状把握

調査結果が映し出す25年間の学習に関する意識・実態の変容

「学習基本調査」は、第1回調査を実施した1990年から25年間にわたり、児童・生徒や学校現場の変容を見つめてきた。第1回調査では、子どもの数が現在の1.6倍いる中で、競争のプレッシャーに苦しむ子どもたちがクローズアップされ、第2回調査（96年）では、学ぶ目的が見えにくい中で、従来の学習を維持しようとする姿が見られた。その5年後の第3回調査（2001年）では、学習時間の著しい減少や学習意欲の低下から「学習離れ」がキーワードとして指摘され、第4回調査（06年）では、前回に比べて回復傾向にあったものの、学力や学習習慣の格差の進展が話題となった。この度、



相次ぐ教育改革を受けて、子どもものの学びはどう変わったか

ベネッセ教育総合研究所の「学習基本調査」は、1990年から子どもものの姿を見つめてきたが、今回の結果では、家庭学習時間や学習態度の大幅な改善が特に注目されている。主要な調査結果を紹介する。

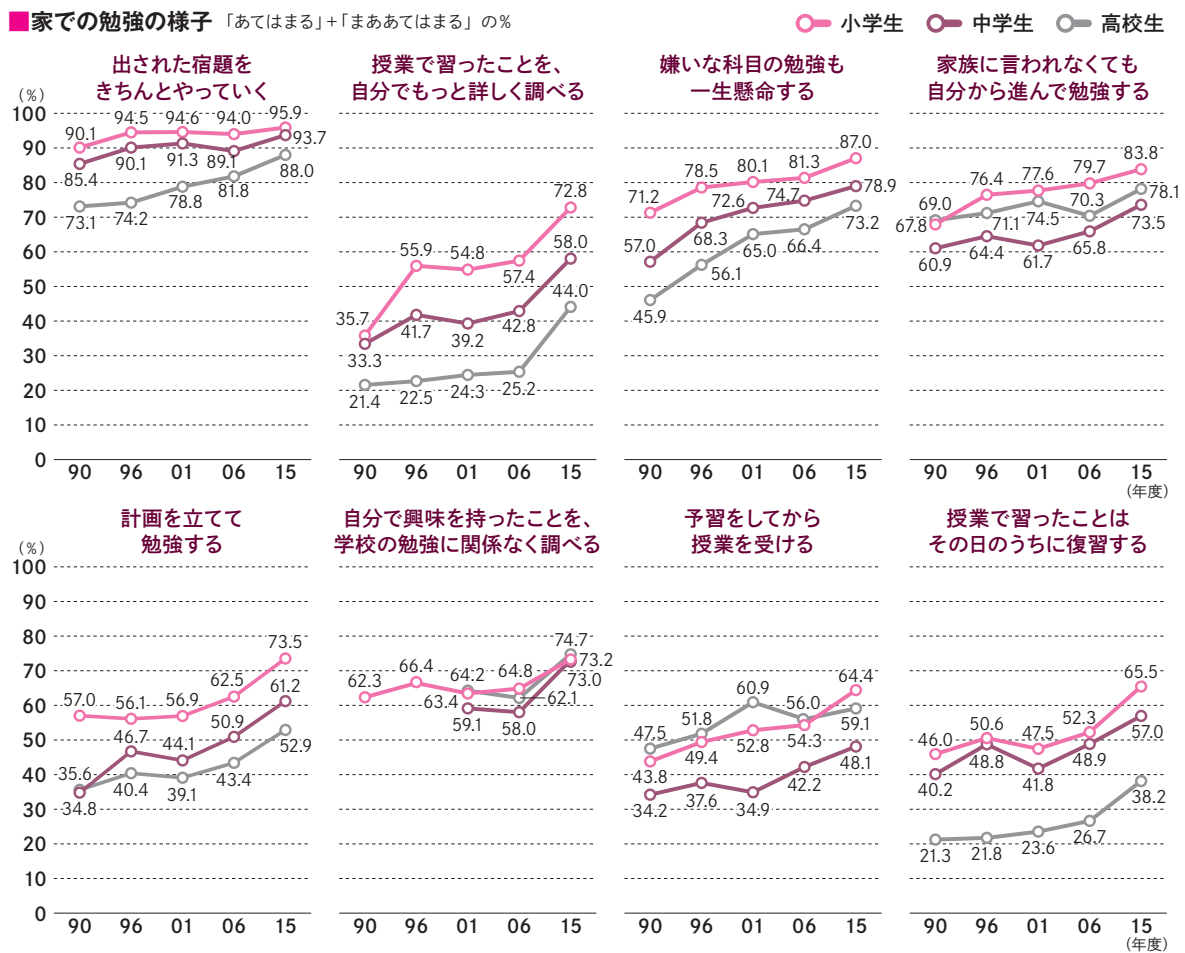
公表された第5回の調査結果は、子どもたちのどのような姿を映し出しているのだろうか。

家庭学習時間が増加し 学習態度や意欲も軒並み改善

最も注目されるのは、小・中・高ともに家庭学習時間が増加していることだ（図1）。特に、小学生と高校生は、前回調査を15ポイント近く上回った。それに比べて伸び率は低いものの、中学生も同様に上昇した。その要因の1つとして考えられるのは、宿題の時間の増加だ（図2）。家庭学習時間の増加は、宿題に取り組む時間の増加でほぼ説明できる。

ただ、子どもたちは、必ずしも与えられた宿題をこなすだけの「受け身の姿勢」で家庭学習に取り組んでいるわけではないようだ。家庭学習の様子を見ると（図3）、「出された宿題をきちんとやっていく」に加え、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」「授業で習ったことはその日の

図3 望ましい学習態度が強化されている



「第5回 学習基本調査」概要

- 調査テーマ 小学生・中学生・高校生の学習に関する意識・実態調査
- 調査方法 学校通しによる自記式質問紙調査
- 調査時期 第1回1990年 第2回1996年 第3回2001年 第4回2006年 第5回2015年
- 調査対象 小学5年生・中学2年生…全国3地域（大都市 [東京23区内]、地方都市 [四国の県庁所在地]、郡部 [東北地方]）
高校2年生（普通科）…全国4地域（大都市 [東京23区内]、および東北・四国・九州地方の都市部と郡部）
- 有効回収数 小学5年生（1990年2,578人、1996年2,665人、2001年2,402人、2006年2,726人、2015年2,601人）
中学2年生（1990年2,544人、1996年2,755人、2001年2,503人、2006年2,371人、2015年2,699人）
高校2年生（1990年2,005人、1996年2,615人、2001年3,808人、2006年4,464人、2015年4,426人）

調査結果の詳細は、下記サイトをご覧ください。

<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4801>

うちに復習する」といった主体的な学習態度に深く関連する項目の肯定率が上昇し、望ましい学習態度が強化されていることが明らかになった。

教科の好き嫌いに対する回答からも、学習態度や学習意欲の改善が垣間見える。小・中・高ともに、ほぼ全教科で、「好き」と答える子どもの割合は増加した(図4)。特に、今回の調査では、算数・数学が「好き」という割合が大きく上昇した。強いて言えば、唯一、中学生の理科が低下していることは課題と言える。

学習の悩みも変化している。「分かりやすい授業にしてほしい」の肯定率が小・中・高ともに低下したのは、子どもにとって分かりやすい授業が増えている表れだろう(図5)。一方で、「上手な勉強の仕方が分からない」の割合は、中・高で依然として高く、いかにして自分に合った勉強方法を身につけさせるかが課題だ。

能動的な学習活動に対して 前向きな姿勢が目立つ

学校での授業や学習に対する好き嫌いに関しても、変化が見られる。

小・中・高とも、「個人で何かを考えたたり調べたりする授業」「いろいろな人に話を聞きに行ったりする授業や調査」「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する授業」など、能動的な学習活動に関する項目で「好き」の割合が大幅に増加していた(図6)。

現在、各学校段階において、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業が推進されているが、児童・生徒からはおおむね前向きに受け止められているようだ。一方で、「先生が黒板を使いながら教える授業」の肯定率も依然として高い水準にあり、従来の指導が決して否定されているわけではないことにも注目したい。

課題はあるものの、指導改善の努力を積み重ねてきた教師にとって、大きな励みとなる結果と言えるだろう。ただ、現場の教師の実感値とは異なる部分もあるかもしれない。今回の結果を現場の実態も踏まえて、児童・生徒のさらなる成長と教師の指導力向上に生かすためには、どのような視点が求められるのだろうか。P.8からの各学校段階の教師による座談会では、その点について考えていく。

図4 算数・数学の「好き」が向上

教科の好き嫌い 「とても好き」+「まあ好き」の%

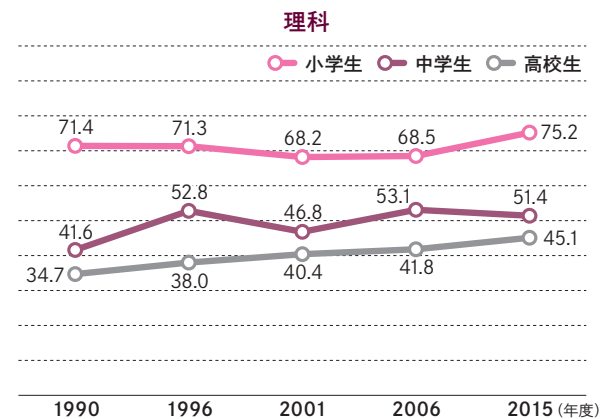
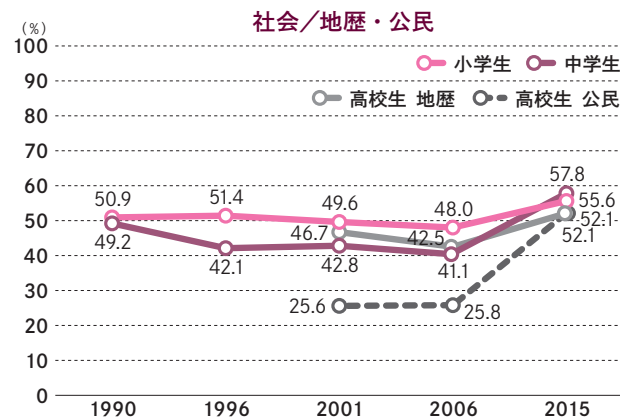
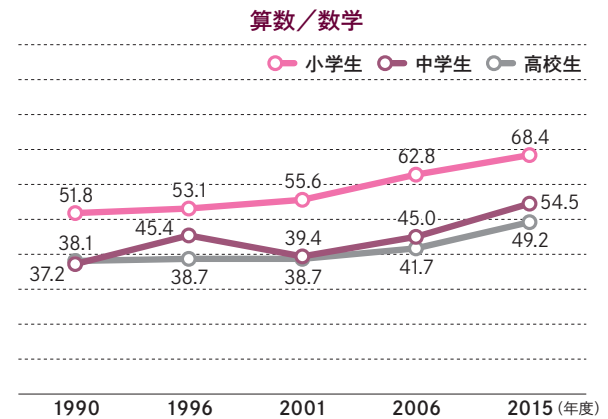
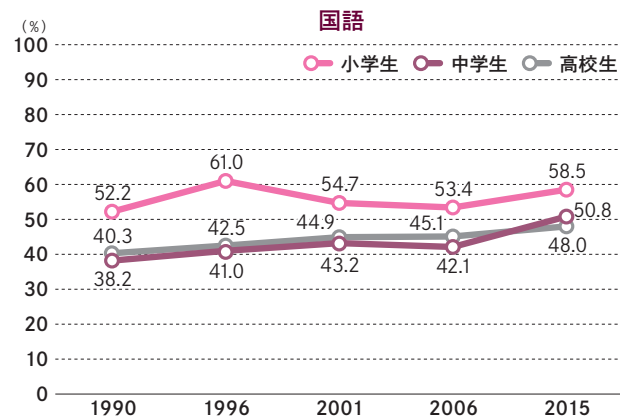


図5 劇的に変わっている学習観

■ 学習の悩み・学習観

○ 小学生 ○ 中学生 ○ 高校生

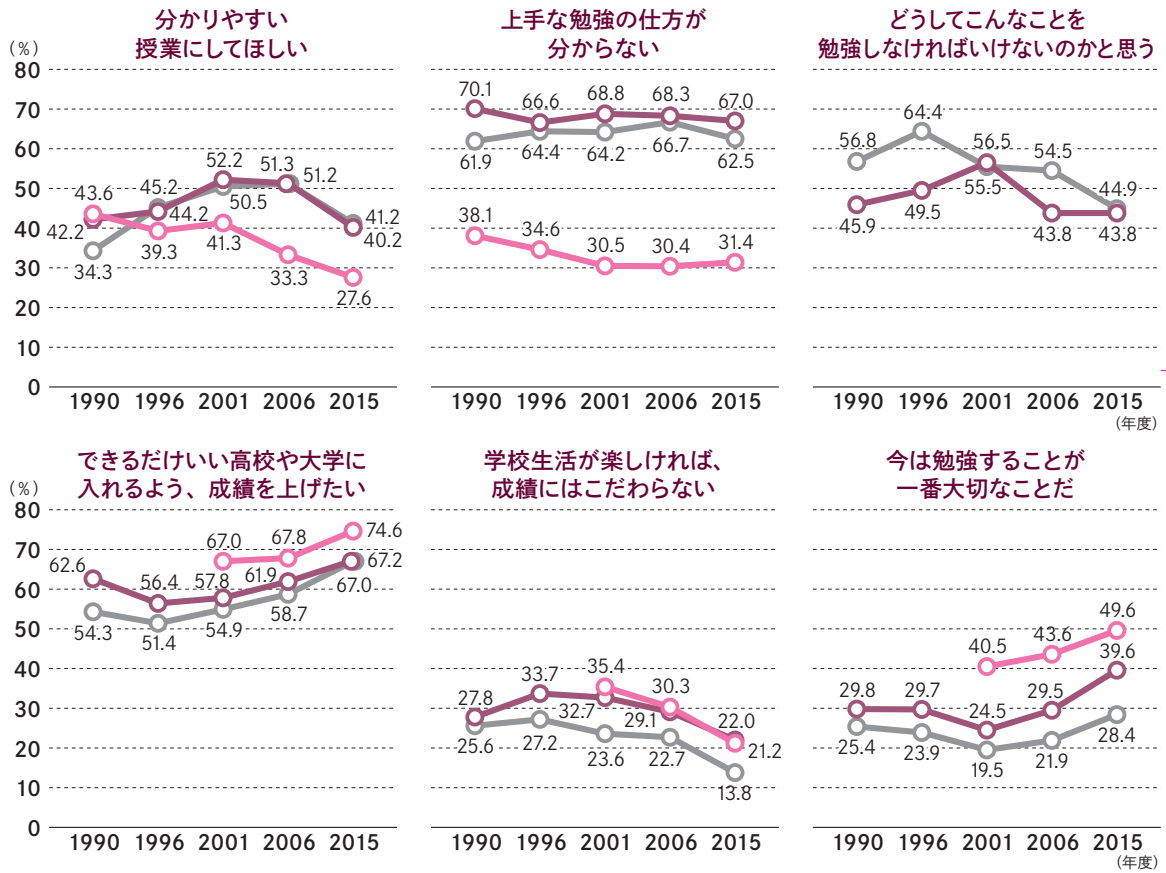
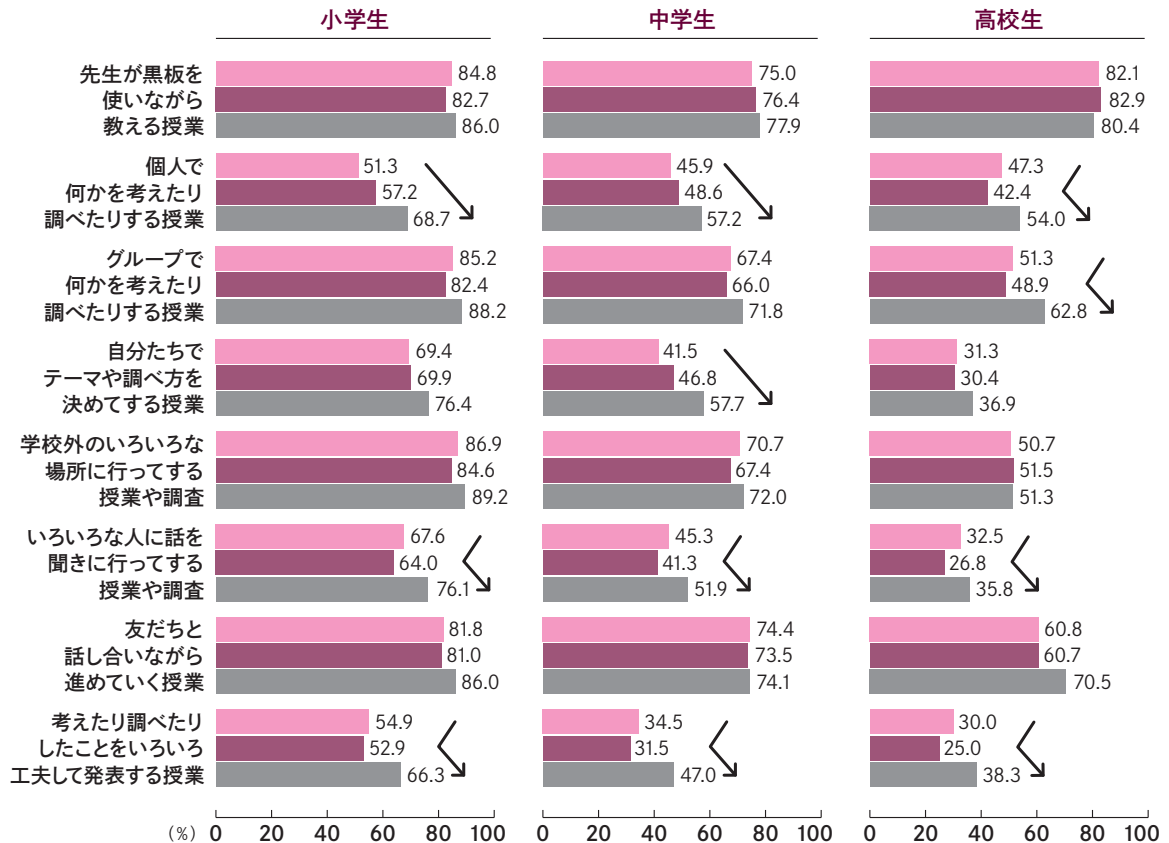


図6 能動的な学習活動に関する項目の評価がおおむねアップ

■ 授業で好きな学習方法 「とても好き」+「好き」の%

■ 2001 ■ 2006 ■ 2015 (年度)



教育の連続性を踏まえた「主体的な学習者」の育成のあり方を考える

学校現場は「第5回 学習基本調査」の結果をどう受け止めたのか。現場の実態と照らし合わせた上で、今後、「主体的な学習者」を育むためには、どのような指導や学び方が必要だと考えているのか。小学校、中学校、高校、大学それぞれの立場から、学校段階の枠を超え、これからの教育のあり方について語り合った。

子どもの主体性は育まれているのか？

家庭学習時間の増加はどのような指導の成果なのか

木村 まず、各校の紹介からお願いします。

田村 東京都足立区立千寿小学校は、2002年、伝統ある2校が統合して開校しました。近年、地域の再開が進み、児童数が急増しています。**加藤** 埼玉県鴻巣市立吹上中学校は、16年度に創立70周年を迎えます。鴻巣市は、埼玉県のほぼ中央にあり、

荒川が流れる穏やかな雰囲気の地域です。

千葉 福島県立福島東高校は、福島市のほぼ中心部にあり、国立大学志望の多い中堅の進学校です。文武両道を校是とし、学習と部活動の両立による自己実現を図っています。

片山 香川県高松市立の高松第一高校は、県内有数の進学校で、10年度からSSHの指定校です。国立大学志望者が多く、卒業後、約7割の生徒が国立大学へ進学します。

樋田 青山学院大学教育人間科学部で高校教育を中心に研究しており、高校研究は30年以上続けています。「第5回 学習基本調査」の調査企画・分析メンバーを務めました。データを俯瞰すると大きな流れは見えますが、大きな変化は、小さな変化の積み重ねで起こるものです。今日は、先生方が現場で感じていることや、児童・生徒がどのように変化しているのかなどについて、お聞かせください。

木村 ありがとうございます。それでは議論に移りましょう。今回の調査結果で最も注目されているのは、小・中・高ともに家庭学習時間が増

えたことです。宿題の増加が一因と考えられますが、いかがでしょうか。

田村 文部科学省「全国学力・学習状況調査」が始まってから、自治体や学校が学力向上に力を入れ始めたことが背景にあると思います。授業の進め方だけでなく、宿題の出し方も、担任に任せきりにせず、自治体や学校規模で工夫するようになりました。その結果、成績下位層の子どもでも、自力で学習を進めやすくなり、一定の学力が担保されているのです。**加藤** 同感です。埼玉県は、県独自に学力・学習状況調査を実施しており、どの学校も学力向上に取り組ん

でいます。本校も学力向上計画を作成し、家庭学習の重要性を含めた指導に力を入れています。

片山 本校も生徒の家庭学習時間は、以前より増えたと感じています。ただ、毎日30分以下という生徒も、3

時間以上という生徒も一定数いて、二極化の状況です。本校では、生徒の主体性を育むため、宿題の量は比較的少なめです。ただ、他校の先生と初期指導について話をすると、入学直後に合宿などを行い、授業や家庭での学習法を指導する高校が増えてくるようです。そうした高校では宿



福岡県立福岡東高校
進路指導主事
千葉 聡
ちば・さとし



高松第一高校
(香川県高松市立)
進路指導主事
片山 浩司
かたやま・こうじ



青山学院大学
教育人間科学部教授
樋田 大二郎
ひだ・だいじろう

題の量も多いようで、その影響で学習時間が増えたのだと思います。

千葉 最近、予備校や公共施設などが自由に学習できる場を開放している、そこで生徒が定期考査前などに学習する姿が見られます。勉強に集中できる環境が整ってきたことが、

前向きな学習態度につながっているのかもしれませんが。本校では、学年ごとに教科間で話し合っただけの分量を調整しつつ、比較的多くの宿題を出しています。宿題をこなすだけの受け身の生徒もいますが、全体的に学習時間は増えていると感じます。



埼玉県
鴻巣市立吹上中学校
校長
加藤 幸弘
かとう・ゆきひろ



東京都
足立区立千寿小学校
校長
田村 正弘
たむら・まさひろ



ベネッセ教育総合研究所
副所長
木村 治生
きむら・はるお

「自学ノート」で育む 児童・生徒の主体性

木村 望ましい学習態度が強化されるなど、質の向上も見られます。

片山 確かに、以前に比べて生徒は真面目です。授業で議論をさせると、積極的に意見を出しますし、プレゼンテーションも上手です。そうした点は今の生徒の長所でしょう。その反面、最後まで自分で考え抜くという粘り強さがなく、すぐに答えを求めめる傾向があります。

加藤 中学校でも真面目な生徒が増え、一昔前のように、授業中に周囲に迷惑をかけるような生徒はほとんどいません。本校でいえば、全校共通の学習規律を設け、教師間の指導の差をなくしたことが大きいと思います。ただ、学習意欲については、学力と同様に、二極化が見られ、中位層以上の生徒がより意欲的となっている印象を受けています。

田村 子どもの学習態度が改善している一因は、学力向上策の一環として指導の標準化が進んでいるから

ではないでしょうか。学校としての明確な指導方針があると、経験の少ない教師でも一定の指導ができますし、担任が代わっても指導がぶれないため、子どもは次に何をすればいいかが分かり、安心して学べます。足立区では、児童に基礎学力を定着させた上で中学校に送り出すことを、区全体で目指しています。

木村 調査では、小・中学校ともに「自学ノート」が定着していることも分かりました。そうした学習形態が、子どもの主体性を引き出している側面は大きいのでしょうか。

田村 本校では、「家庭学習の習慣化」「主体性の育成」「個に応じた学習」を目的として、自学ノートに取り組みさせています。自学ノートでは、自分の興味・関心に沿って課題を決められるため、学習意欲が湧きやすく、達成感も得られやすいようです。提出は任意ですが、できるだけ毎日取り組むように児童に働きかけていて、提出率は毎日ほぼ100%です。内容は自由ですから、昆虫好きの子どもが、昆虫についてずっと探究し

*プロフィールは2016年3月時点のものです

続けるケースもあります。

加藤 本校でも、全学年で自学ノートを実施しています。ただ、自学ノートとはいえ、高校入試を控える3年生では、内容が不十分な生徒を昼休みに集めて、再度取り組ませることで、学力向上につながっています。

木村 教科の好き嫌いでは、ほぼ全教科で、その教科を「好き」と答える子どもの割合が増えていました。が、中学校の理科では減少していました。

加藤 本校の上位層の生徒に理科について聞くと、「力や電流など、目に見えない現象について考えるのが

難しい」と話していました。あくまでも一生徒の意見ですが、うなずける部分もあります。

田村 小学校では理科好きが増えていましたが、その要因の1つには、現行の教育課程で授業時数が増えるとともに、国からの補助金がついたため、各校の実験器具が整備され、観察や実験が充実してきたことが挙げられると思います。

加藤 中学校の理科は、現行の教育課程で学習内容が増えたため、授業にゆとりがないでしょう。16年度は理科の教師1人の増員を希望し、指導の工夫を図っていく予定です。

アクティブ・ラーニングの本質とは？

学力の3要素を伸ばす 授業のあり方とは

木村 調査では、能動的な学習活動に関する項目で「好き」の割合が増えています。学校段階にかかわらず、主体的な学習者の育成は大きな課題です。各校の、いわゆるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の現状を

教えてください。

田村 小学校では、ALはかなり定着しています。一例ですが、複数の解から最適解を選ぶという算数の授業を紹介します。課題は、「メロン、スイカ、リンゴを仕入れ、利益が原価の50%になるように定価をつけて売上目標を達成するために、それぞれ何割引で何個販売すればよいの

かを算出する」という内容です。個人で考えた後、グループで話し合う

のですが、「その店の地域の世帯数はどれくらいか」「他店と比べて値段が高すぎないか」といった実生活にもありそうな条件をつけ加えたので、子どもたちは楽しそうに取り組んでいました。この問題は、基礎学力はもちろん、実生活にも役立つ思考力が鍛えられる問題であり、学力の3要素を総合的に高めることができたと考えています。

樋田 それは素晴らしい授業だと思います。まず自分で課題を見つけ、そして、それを解決するための方略を考え、答えらしきものが複数出たら、その中から最適解を選ぶ。そういった課題解決型学習が実践されています。課題解決型学習では、「どれくらい学力の3要素が身について



「唯一解ではなく、最適解を追い求める学びを」

青山学院大学 教授 樋田大二郎

いるか」という視点を持つことが、学びを充実させる鍵だと思います。

加藤 本市では、「ALをより充実させる」という方針を打ち出しています。本校でもそれぞれの教師が実践しています。私は、先生方に「ALが形式的にならないように」と、よく話しています。ALは、単に話し合いの形式を取り入れればよいといったものではなく、個々が考えを深めていくことを目的とした手段の1つであることを、しっかり認識・理解する必要があります。

片山 本校では、SSHの1期目で科学的思考力の育成を目的に理科でALを研究し、2期目は、1期目で得た成果を全教科に広めようとしています。各教科の推進委員がほぼ月1回集まり、ALを通して育みたい力とその手法について話し合っています。



東京都足立区立千寿小学校 校長 田村正弘

「分かったふりをせず、
『分からない』と言える
子どもを育てたい」

す。現段階では、インプットの直後にアウトプットをすると、学習効果が高まるという考えから、全校で授業の振り返りを重視しています。ALには、「進度が遅れる」「準備が大変」という声もありますが、「活動を通して生徒の思考の過程が見えるため、授業の理解度を把握しながら授業を進められる」という声も聞かれます。ALの導入により、教師の意識が大きく変化していると感じます。

千葉 小・中学校に比べると、高校

従来型の授業形態が全てアクティブではないとは言いい切れません。静かに考えている場面でも、脳に汗をかきくらい必死に考えているのなら、それは十分にアクティブな学びです。英語の授業がALそのものではなくても、生徒が習得した英語を外国に行つて使いたい、海外で仕事をしたいと本気で思ったなら、やはりそれはアクティブな授業と言えるのではないのでしょうか。

樋田 そう言えると思います。コイ

ンの表側が知識としたら、裏側には感情、感性、あるいはアイデンティティーがあります。知識だけでは社会とつながりにくいですし、逆にアイデンティティーだけが肥大化しているのも困りものです。英語の授業

で意欲が湧いて「海外で働きたい」と感じることも、コインの裏表と言えます。学びが「自分事」になるように配慮されたバランスの良い学習活動こそ、ALだと言えるでしょう。

田村 自分に引き寄せて考えることは、本当に大切だと思います。本校では、主体的な学習者を「『分からない』と、とことん言える子ども」と言い表しています。教師の説明や友だちの発表に対して、分かったふりをせず、納得できるまで考え続けられる力を伸ばすことを、16年度の研究テーマとする予定です。

思考力・判断力・表現力の育成は学校段階間の連続性が重要

木村 小・中・高の学びの連続性を考えることも大きなテーマです。

田村 小学校段階で習得させる「知識・技能」は、それほど高度なものではないので、本当に深い学習活動までには発展させづらい面があります。ただ、ALの本来の目的は学校段階が上がるにつれて達成されるものと、私は考えています。もちろん



小学校でも、「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を育みたいと思いますが、「知識・技能」のように、「小学校はここまで」といった指導・評価基準を設けるのは難しいのが現状です。これは、小・中・高がともに考えるべき重要な教育課題だと思います。

樋田 小・中・高で積み上げていくという視点は、とても大切です。大



「教師が
手をかけ過ぎなければ、
生徒は自分で考える」

高松第一高校 進路指導主事 片山浩司

木の授業ではAIが多く取り入れられていきます。その学びをより深いものとするために、早い段階から主体性を育むことが大切だと思います。

木村 教育心理学では、主体的な学習者には、自分の学習状況を客観的に捉える「メタ認知」、具体的な「学習方略」、「学習意欲」の3つが必要であるとされています。高校段階までにそれらを育むことが理想的です。

樋田 大学での学びは、自分で動かなければ得られません。自分で学習

方法を工夫してこそ、学びを広げることが出来ます。小・中・高で知識や感性をバランスよく育てるAIを実践することは、大学進学後にも大きなプラスとなります。

木村 それは、社会にとってもプラスになることです。働き方は転換期を迎えており、今後はいかに付加価値を高めるかが求められます。大学時代までに試行錯誤して自分なりの解を見つける経験を積むことが、ますます重要になるでしょう。

主体的な学習者をどう育てるのか？

手をかけ過ぎない指導が
子どもの主体性を育む

木村 主体的な学習者を育むために

求められる指導とは何でしょうか。

片山 本校は、生徒の主体性を尊重し、手をかけ過ぎない指導を心がけています。宿題を多く与える指導は、

下位層の底上げには有効ですが、それだけで満足してしまう生徒もいるからです。また、ヒントを与え過ぎると、どうしても出てくる答えが似てしまいます。多様な考え方があることを理解させるためにも、教師が教え過ぎない方がよいと考えます。

千葉 今日のお話で、小・中学校では主体的な学びを十分に積み重ねていることが分かりました。一方、高校では学習への動機づけをねらいとして、入学時に高校での学習方法を指導していますが、それでは、生徒が培ってきた主体性をリセットしていきながら育みます。手をかけ過ぎること、生徒の主体性や創造性の芽を摘んでしまっているかもしれないということに気づきました。小・中学校で児童・生徒がどのような学びを経験しているのか、我々もつ



と学ばなくてはなりません。

樋田 むちゃと感じられる環境を与えることで、育つ力や姿勢もあると思います。いわゆる「ゆとり教育」の時代には、教師が手をかけ過ぎないことで子どもの創造性が育つと考えられていましたが、その効果はあまり見られませんでした。むしろ、涙を流すほど大変な思いをして答えを探したり、時間が経つのも忘れて昆虫について調べたりといった経験に、大きな意味があると思います。

片山 本校では、SSHでの課題研究において、生徒はほぼ自力で課題設定をします。そのため、研究過程でもかなり苦労するのですが、そうした生徒の多くは、「しんどかったけれど、よかった」と語ります。少し無理のある課題に取り組んだからこそ得られた充実感なのでしょう。

「苦勞を乗り越え、
体験を通して育つ力、
自信、意欲が大事」

埼玉県鴻巣市立吹上中学校 校長 加藤幸弘

加藤 教師は不安がありますが、時には生徒が失敗することも大切です。本校では、学校行事等の企画・運営を生徒に委ねており、失敗してもよいと繰り返し伝えていきます。苦勞を乗り越える体験を通して育つ力、自信、意欲は、学習にも結びつくと考えています。

田村 同感です。これからの教科学習では、答えを求めるだけでなく、その答えに至るまでの過程や答えの根拠を理解・説明できる力がますます必要とされるでしょう。例えば、15年度の「全国学力・学習状況調査」の理科では、水の温まり方について、誤った仮説が正しかった場合を想定して答えるという問題が出題されました。これは、学力観を転換しなければならないという、国からのメッセージだと受け止めています。そのような力は、成功体験だけでは伸びず、試行錯誤や失敗を経験することで身につけていくのだと思います。

外部リソースの活用が 学習活動に広がりをもたらす

木村 主体的な学習者を育むために

は、制度的にも学校段階を超えた連携が必要ですね。

田村 今後は、小・中・高の連続性をより意識した指導をしていきたいと考えています。足立区では、幼稚園から高校までが連携し、高校中退者の減少を目指した「U16プロジェクト」に取り組んでいます。基礎学力不足が退学の大きな要因になると捉え、幼児期にどのような体験が必要か、小・中学校でどのような指導をすればよいのかを検討し、学校段階ごとに目標を設定しています。

加藤 埼玉県では、15年度から県独自の学力調査を通じて、小学4年生から中学3年生まで一人ひとりの経年変化を追うことにしました。それにより、様々な取り組みが子どもの



学力や学習態度・意欲にどう影響しているのかを確認し、より個に応じた指導を行いたいと考えています。

千葉 教科学習だけではなく、部活動や学校行事など、様々な教育活動を通じて、生徒は伸びていきます。校内はもちろん、地域のリソースも積極的に活用して、生徒が成長の

きっかけを得られる場をこれまで以上に提供したいと思います。教師が写真を描き過ぎず、とにかくかけを与えて、どのような可能性につながるのかは生徒と一緒に考えるという姿勢で取り組んでいきます。

片山 本校は、SSH指定校として比較的恵まれた環境にあります。外部リソースを活用しながら、生徒の思考や議論を促し、探究を深めてい

「外部のリソースも活用し、 生徒が成長のきっかけを 得られる場をつくる」

福島県立福島東高校 進路指導主事 千葉 聡

く方法を引き続き模索していきたいと思えます。例えば、文系の生徒には、社会問題を議論して、市に解決策を提案するといった活動も考えられるでしょう。

木村 学校外の資源を活用するという観点は重要です。それを考える時、地域の教育力を学校とどうつなぐのかという視点が求められるはずだ。

樋田 我々大学もそうですが、外部リソース側は、むしろ「活用してほしい」と願っています。学生が児童・生徒と接することのプラス面は大きく、双方に利点があります。多忙化を課題として抱える先生方の負担を軽減するという観点でも、学校が地域のリソースを活用する意義は大きいでしょう。先生方の話を聞いて、児童・生徒、そして学び方や指導のあり方は大きく変容していると実感しました。大学も変わらなければならぬという思いを強くしています。

座談会で言及された、主体的な学習者を育むための高校の実践事例を次ページから紹介します。



生徒・教師がオープンマインドで語り合う土壌を英語を軸につくる

大阪府「骨太の英語力養成事業」の指定校である大阪府立箕面高校では、英語の授業を中心に、論理的思考法の習得と他者理解に重点を置き、授業改善を図ってきた。生徒が安心して発言できる場づくりに力を入れ、教師も生徒と率直に語り合うようになったところ、生徒にチャレンジ精神が育まれてきたという。在学中に起業する生徒や、海外の名門大学に直接進学を目指す生徒も現れた。

英語を軸とした授業改革で生徒の主体性を高めていく

大阪府立箕面高校では、2014年度に民間出身の日野田直彦校長が就任し、「21世紀型の課題解決学力の育成」(図)をテーマにグローバルな視野での学校改革を進めている。改革の成果は、ここ2年間の学力の伸びに表れている。特に英語は、ベネッセの1年生11月の進研模試で、偏差値60以上の人数が2年前の37人から15年度は90人と大幅に増加。他教科も増加傾向にあり、国語

は17人から33人、数学は17人から44人と堅調に推移している。また、GTEC for STUDENTSでは、グレード5以上の人数が56人(1年生7月)から79人(1年生12月)と顕著な伸びを示した。

国内外のコンテストに出場して実績を上げる生徒も現れ、14年、ダボス会議(*)の若手メンバーが主催する「次世代リーダー育成支援プロジェクト Re-Generate Japan」のファイナリストに当時1年生の生徒が選ばれた。この生徒は、2年生となった15年度、プログラミング教室

を起業した。

「2年生にはアメリカの名門大学に交換留学できるレベルの生徒が20人以上いて、そのうちの1人はハーバード大学への進学を希望しています。日本の公立高校から海外の名門大学への進学が現実味を帯びてきました。それが夢ではないという雰囲気、今の本校にはあります」と、日野田校長は語る。

同校が取り組んできた改革を、主に英語教育を軸にした思考力の育成、授業・課外活動による主体性の向上の2点から見えていく。

図 「箕面高校でつけるべき力」

21世紀型の課題解決学力

- ロジカル・クリティカル
- デザイン・システム思考
- ディベート思考

インタラクティブ授業

- ソクラテス・メソッド
- 学び合い、ワークショップ
- ファシリテーション

各教科・活動

- 教科指導
- 部活・生徒会活動
- 英語・グローバル教育

*学校資料を基に編集部で作成

*世界経済フォーラムの通称。スイスのリゾート地ダボスで毎年1月に開かれる。



大阪府立箕面高校校長
日野田直彦 ひのだ・なおひこ
同校に赴任して3年目。「多くの人が無理と思っていることにこそチャンスと楽しみがある」



大阪府立箕面高校
池谷陽平 いけだに・ようへい
教職歴5年。同校に赴任して6年目。首席。1学年主任。「生徒に未来への希望を与えることが教師の仕事」



大阪府立箕面高校
寺下公章 てらした・ひろあき
教職歴29年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。「生徒に大きな夢を持たせ、その実現のために支援する」



大阪府立箕面高校
高木草太 たかぎ・そうた
教職歴1年。同校に赴任して1年目。府が派遣するSET（スーパー・イングリッシュ・ティーチャー）。

大阪府立箕面高校

- ◎校訓は「自主自律・和親協力」。2014年度、大阪府の「骨太の英語力養成事業」推進校に指定され、TOEFL講座、海外留学の充実などの改革に取り組んでいる。
- ◎設立 1963（昭和38）年
- ◎形態 全日制／普通科・国際教養科／共学
- ◎生徒数 1学年約400人
- ◎2015年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、金沢大、大阪大、大阪教育大、和歌山大、徳島大、大阪市立大、大阪府立大などに60人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ838人が合格。
- ◎URL <http://www.osaka-c.ed.jp/minoo/>

英語教育の目標は 論理的思考力の向上と他者理解

同校の改革の追い風となったのが、14年度に始まった大阪府「骨太の英語力養成事業」（以下、骨太事業）だ。これは、専任講師の派遣やTOEFLに対応した授業により、英語圏の大学で修学できる英語力の育成を目指す事業で、同校を含む17校が指定を受けている。同校の英語教育の目的は、「英語を使ってロジカル、クリティカルな思考法を身につけること」と「他者理解」の2つだ。日野田校長はこう説明する。

「グローバル人材とは、文化や国境、常識の壁を超えるボーダーレスな人材だと考えます。ですから、対話によって相手との同質性や相違点を見抜き、それらを認識した上で、素直に認め合う気持ちを育むことが大切です。誰とでも仲良くするということではなく、仲良くできない人であっても、認め合う意識と態度、そして見識が求められるのです」
そうした力や姿勢を育むため、同

校では、自分の考えを英語で述べる活動を繰り返す。その中で、コミュニケーションに必要な英語力が自然と身につくという。

英語を使った論理的思考力の育成を行うのが、国際教養科の学校設定科目「CAELL演習」（週2回）だ。これは、TOEFLに対応した授業となっており、クリティカル・シンキングやデザイン・シンキングなどの論理的思考法、マインドマップやTチャートなどの合意形成・意思決定のためのノートテイキング技法などを主に学ぶ。1年生の初めは英語を使わず、日本語で思考法・技法のトレーニングを徹底的に繰り返して、基礎を築いてから、英語を用いた授



写真 マインドマップを書き、ブレインストーミングを行う生徒たち。生徒がいつでもメモできるように、教室の壁がホワイトボードになっている。塗るだけでホワイトボードのように書いたり消したりできる特殊なペンキを特注した。

業を行う。
授業は、講義形式ではなく、インターナショナルスクールなどで行われているワークショップやアクティブラーニングのスタイルで、生徒同士が課題解決について考える活動が中心だ。骨太事業の特任講師として同科目を担当している高木草太先生は次のように語る。

「海外で学ぶ日本人が最初に突き当たる壁は、論理的思考法やノートテイキング技法です。国内の高校で何度か教壇に立った際、私の話をひたすら聞いてノートを取っている生徒たちを見て、まずは議論できる環境づくりや、議論の土台となるツールを教える必要があると考えました。教室は間違ってもよい場、チャレンジできる場であり、失敗を楽しいという共通認識さえできれば、生徒はおのずと活発に議論するようになります」

他教科の教師がTIで入り、 ノウハウを全校へ広げる

ユニークなのは、授業を他教科の

*プロフィールは2016年3月時点のものです

教師とのチーム・ティーチングで行うことで、教師がバカロレアなどで使われる指導方法を学ぶ場としている点だ。そうして、国語や社会、美術や保健体育などでも、そのような指導方法を取り入れた授業をする。ことで、国際教養科の取り組みを全校に波及させることをねらいとしている。

もちろん当初は、生徒も教師も間違いを恐れて、教室が沈黙に包まれることが多々あった。そこで、高木先生は、「間違ってもいいし、『分かりません』でもいいから、とにかく話そう」と徹底して呼びかけた。

「議論の場で何も発言しないのは、クラスという『チーム』に何も貢献していないのと同じです。自分がチームにどのような価値を提供できるのかを考えることは、アクティブ・ラーニングを成立させる大前提だと思います」（高木先生）

進路指導部長の寺下公章先生は、担当する数学の授業の変化を次のように語る。

「ロジカル・シンキングやクリティカル・シンキングを意識し、生徒との双方向な授業形態を心がけていま

す。生徒に『なぜ?』と投げかけることが多くなりましたし、生徒も自分がいっ聞かれても答えられるような姿勢で授業に臨んでいるように思えます」

海外の起業家との ワークショップを実現

希望者対象の短期留学制度も刷新した。行き先をアメリカとし、語学・交流などを主体としたプログラムから、マサチューセッツ工科大学（MIT）のアントレセンタ―所長やハーバード大学出身のベンチャー企業の社長との交流などを行うプロジェクト学習に変えた。

「起業家育成の第一人者や3DPプリンターの開発チームの一員など、MITやハーバード大学の世界最高のメンバーに来てもらいました。起業家を持つ社会課題の解決に取り組むマインドを体感してもらおう上で、生徒にとってこれ以上ない経験になったでしょう」と、日野田校長は振り返る。

16年度はボストン（MIT）、シリコンバレー、国内のイングリッシュキャンプの3コースを用意し、

経済的な理由で留学できない生徒への支援も行う予定だ。

課外ワークショップを活用し モチベーション向上を図る

もう1つ力を入れているのが、主体性向上のための場づくりだ。課外活動やLHRを活用し、様々なワークショップを開く。

例えば、16年1月に実施した「イングリッシュキャンプ」では、ハーバード大学やイギリスのロンドン大学などから十数人の学生をファシリテーターとして招いて課題解決型学習を行った。3〜5人1組となり、各自で案を出し合い、最後にチームの見解をまとめて発表した。

そこで重視したのが、生徒も教師もオープンマインドで語り合う雰囲気をつくることだ。「教える側」と「教わる側」の師弟関係ではなく、一緒に考え、悩みを分かち合う「同志」として議論する。

「意見や案を出し合う時に、そこが安心・安全な場だという前提で語り合う素地が、日本人にはありません。相手を傷つけてしまうのではないか、その場の雰囲気壊してしま

うのではないかと思ってしまうのです。それは日本人の美徳ではありますが、グローバル化が進む現代社会では、非言語で理解し合うことは極めて難しくなってきました。思い切って自分をさらけ出す、他者との違いを認め合う、そこから初めて共感や共有の気持ちが生まれるのです」（日野田校長）

「なぜ、学ぶのか」という根源的な問いも大切にしている。15年度、1年生のLHRで、「今、何を学ぶか」をテーマにしたワークショップを3週連続で行った。希望者による十数人の生徒から成るプロジェクトチームをつくり、企画・運営を担当。将来、何を仕事にして、社会のどのような課題を解決したいのか、そのために今、何をすべきかを話し合った。そのワークショップを担当した1学年主任の池谷陽平先生は、生徒の変化をこう語る。

「初めは活動自体に疑問を持つ生徒もいましたが、ワークショップが終わる頃には、2年生でこの活動の続編を行うためにはどうすればいいのかを、生徒たちが自ら相談し始めていました。オープンマインドで語

インタラクティブな関係を重視した授業へ転換

り合うことで、思考が深まることを実感した生徒が多かったからだと思います」

普段の授業でも、教師と生徒、生徒同士の双方方向の関係を大切にしている。

例えば、英語では、以前は講義形式が授業の6割を占め、知識の定着を主眼とした内容が多かった。今は「生徒が英語を好きになる」ことを第一のねらいとして、スピーキングに比重を置いた内容としている。単に日常会話ができるだけではなく、英語で自分の考えを述べられるようにするのが目標だ。内容も、生徒同士で考えを述べ合い、発表するスタイルがほとんどだという。

1年生を例にすると、まず教科書を一読した後、文章の概要をイラストやマインドマップなどを使って表現し、それをグループで共有する。そして、他者の意見も取り入れながらサマリーを作成する。「英語を」

学ぶのではなく、「英語で」学ぶ。つまり、コミュニケーションを取ることに主眼を置いているのだ。

「大学入試も大切ですが、それ以上に、生徒が一生学び続けるために必要なスキルや態度を身につけさせることが重要です。生徒全員が英語を話せるようになりたいと願っていますし、そうした意欲を引き出すことで、主体的に学び始める生徒も少なくありません」と、池谷先生は手応えを述べる。

教師間にもオープンマインドで語り合う雰囲気生まれる

2年間の改革を通して、学力以上に大きな変化を見せているのが、生徒の意識だ。大勢の人の前で自分の意見を述べる生徒や、論理的に考え主張する生徒が増え、中には自ら授業改善案をまとめて教師に提案する生徒もいるという。

授業改善に対する教師の意識にも変化が見られる。教科の壁を超えて自主的に授業を見せ合い、さらに授業に対して自由に意見を述べ合う雰

囲気が生まれ、指導改善に結びつけている教師が増えている。特に、20代〜30代の若手教師の変化は大きいという。寺下先生は次のように語る。

「私たち教師には、プロとしての結果が求められます。その1つが進学実績ですが、本校ではまだ満足いく結果が出ていません。『楽しいから勉強するのではなく、勉強するから楽しいのだ』という言葉があります。今後、双方方向の授業を一層深化させ、低学年から学びの楽しさを感じさせられる雰囲気をつくり、

生徒の進路実現を果たしていきたいと思っています」

今後の課題は、国際教養科を中心に行っている授業メソッドを、学校全体へとさらに普及を図っていくことだ。

「高木先生が実践しているバカロレア的な指導方法を、普通科の授業や英語以外の教科にも広げていくことが、今後の課題です。我々が学校を去った後も先生方が継続していただけるようなフォーマットを考え、学校文化として定着させていきたいと思っています」(日野田校長)

生徒の声



山本つぼみさん
国際教養科
2年生

一番学んだことは チャレンジする心

本校に来て最も学んだことは、チャレンジする心です。中学校時代は間違えることが恥ずかしいと思っていましたが、この高校では、「失敗を恐れず何でもやってみなさい」と先生が言うことができました。ことに心強さを感じます。

以前は英語が苦手でしたが、友人や先生から刺激を受けて、海外の大学を意識するようになりました。2015年度には、国内の高校生研究発表コンテストにチャレンジし、特別賞を受賞することができました。

生徒が提案した授業改善案を、前向きに受け止めてくれる先生も多いです。今では、学習意欲も高まり、自分で学習の方法を工夫することで成績も上がりました。第1志望校は、ハーバード大学です。簡単ではないことは分かっています。でも、夢に向けて、挑戦したいと思います。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

全校体制で言語活動を取り入れ、 分かる、深まる楽しさを引き出す

岡山県立岡山芳泉高校は、国立教育政策研究所の研究指定を機に、全校体制で言語活動を中心としたアクティブ・ラーニング（以下、AL）を推進している。年度当初に研修の計画立案や体制構築をしっかりと行い、ALの考え方や有効な指導法などの普及を図ったところ、今では、6割の教師がほぼ毎時間ALを行っているという。生徒の学習意欲や学力も向上してきており、教師たちは大きな手応えを感じている。

計画的な研修と「AL通信」 で意識変革を促す

岡山県立岡山芳泉高校が、言語活動を中心としたアクティブ・ラーニング（以下、AL）を授業に取り入れ始めたのは、2014年度のこと。数学科が、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業で、「思考力・判断力・表現力を育成する指導方法の研究」に着手したのを機に、学校目標の1つに言語活動の強化を据えて、学校全体でも授業研究を始めた。研究指定を受けた41期生（15年度

2年生）の躍進はベネッセの進研模試の結果にも表れている。数学の偏差値は、1年生7月記述の54・8から、2年生1月記述で59・3まで伸び、国語や英語も軒並み例年を上回っている。学習意欲の向上も顕著で、2年生段階での家庭学習時間は過去6年間で最長の1日平均220分にあがった。豊岡秀明校長は、次のように分析する。

「生徒全員が、授業に前向きに取り組むようになったのが大きいと思います。受け身の生徒が減り、教え合う中で周りの生徒から刺激を受け、

学びが深まっているのを感じます」

言語活動を研究テーマにした背景には、生徒の主体性を引き出したいという教師の思いがあったと、進路指導主事の三村直子先生は語る。

「本校の生徒は真面目で素直ですが、主体性や積極性に欠ける点がありました。自分から積極的に授業にかかわる機会を与えることで、学びの楽しさを知ってもらおうのと同時に、学力の定着も図りたいと考えました」
14年度、各教科の代表1人から成る「学力向上事業推進委員会」をつくり、委員13人を中心に、各教科で

言語活動を取り入れた授業を行い、その成果を公開授業で発表した。

同年12月、中央教育審議会から高大接続に関する答申が出されたのを機に、ALを研究テーマの中心に据え、15年度、全教科で本格的に研究を始めた。年度当初に研修や公開授業の年間スケジュール（図1）を公表して見通しを示した上で、教科内での互見授業や、録画した授業を見ながらの意見交換などを重ねた。10月、外部講師による研修を実施して共通理解を深め、その翌月、全教科で公開授業を実施した。



磯部真実 いそべ まさみ
岡山県立岡山芳泉高校
教職歴10年。同校に赴任して7年目。2学年担任。「地理を通して、思考する力の育成。地理で世界を知ろう」



大口惣司 おおぐち そうじ
岡山県立岡山芳泉高校
教職歴14年。同校に赴任して7年目。2学年担任。「生徒全員が分かる授業を目指して、日々、授業改善！」



瀧川恭子 たきかわ きょうこ
岡山県立岡山芳泉高校
教職歴22年。同校に赴任して10年目。2学年副主任。「ローカルに、グローバルに活躍する人材を育てたい」



小野政博 おの まさひろ
岡山県立岡山芳泉高校
教職歴28年。同校に赴任して15年目。指導教諭。「生徒に学ぶ楽しさを伝え、探究する心を育てていきたい」



三村直子 みむら なおこ
岡山県立岡山芳泉高校
教職歴28年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。「何事も誠実に行えば、必ず生徒に伝わる」



豊岡秀明 とよおか ひであき
岡山県立岡山芳泉高校校長
教職歴37年。同校に赴任して4年目。「高い次元の文武両道に挑戦させた」

岡山県立岡山芳泉高校

- 2002年度、単位制・2学期制の進学重視型単位制高校となる。14年度から協働学習を軸とした授業改革に着手。「総合的な学習の時間」を活用したキャリア創造プロジェクト、電子黒板などを活用したICT教育にも力を入れていく。
- 設立 1974（昭和49）年
- 形態 全日制・単位制／普通科／共学
- 生徒数 1学年約320人
- 2015年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大などに235人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ443人が合格。
- URL <http://www.hosen.okayama-ed.jp/>

この間、学力向上事業推進委員会では、AL学習会の開催や、『AL通信』（P.20図2）の発行などを通して、有効な指導法や各教科の研究授業の様子などを伝えて、ALの普及に努めた。研修を主導してきた指導教諭の小野政博先生は、そのねらいをこう話す。

「次期学習指導要領改訂に向け、待ちの姿勢ではなく、先進的に取り組もうと考えました。『授業に取り入れてみよう』『自分も頑張ろう』と、先生方の意欲を高めたことで、ALの

図1 アクティブ・ラーニング研修スケジュール

前期 研究	4月	● 学力向上事業推進委員会を中心に（教科主任と協力して）、各教科でアクティブ・ラーニングについて研究、推進（教科内で互いに授業を参観、意見交換。他校の研究授業に参加）
	6月	● 授業評価及び公開授業 ①生徒による授業評価「これまでの授業を振り返って」 ②教員による授業評価「生徒授業評価の分析と自己評価」
	7月	● 各教科で、前期の具体的な取り組み、研究内容をまとめる
後期 実践	10月	● 外部指導者による教員研修により、アクティブ・ラーニングの共通理解を図る ● 教員研修を受けて、各教科が工夫した授業スタイル（芳泉スタンダード）の研究、開発を行う（教科内で互いに授業を参観、意見交換）
	11月	● 「芳泉コミュニケーションデー～新しい授業のカチと伸びるチカラ～」で、学力向上事業推進委員会を中心に授業を公開（他校にも案内）し、研究成果を発表する。授業実施者は26人 ● 公開授業で、全教員が学校全体（他教科にも）に研究、開発した授業を公開する。その後、各教科で研究協議を実施 ● 授業評価及び公開授業 ①生徒による授業評価「これまでの授業を振り返って」 ②教員による授業評価「生徒授業評価の分析と自己評価」
	1月	● 各教科の1年間の取り組み（研究成果）を紀要にまとめる

*学校資料を基に編集部で作成

取り組みが学校全体に広がりました」

数学、英語

ペアワークを基本とし、ものの見方を広げさせる

数学科の大口惣司先生（おおくち そうじ）の授業は、ペアワークを基本に進められる。教師がその日に学習する定理・公式や基本解法を一通り説明した後、生徒は隣同士でペアになり、1人が問題の解き方を説明し、もう1人は疑問

点を投げかける。大口先生が解答を板書する際、わざと途中の式を間違えて書き、おかしい点を生徒に考えさせることもある。教師の言葉でも、うのみにせず、批判的に物事を見る視野の広さを養うのがねらいだ。

授業の雰囲気づくりで心がけているのは、「分かったふりをさせない」ことだ。問題を出した後、生徒は全員立ち、分かった生徒から座る。また、分かった生徒は右手、分からなかつ

*プロフィールは2016年3月時点のものです

図2 『AL通信』

AL通信

学力向上推進委員会
平成27年7月25日発行
第18号

先立方がメディアアワーを振り入れた授業の様子をご紹介します。
第1と10日は、理科（物理）の小野先生の授業の模様です。

8月19日（金）1校時、2次修正、家庭、の授業、單元での「メン1」（物理第1）。

疑問問題をグループ学習で展開…

單元を一通り学習した後、疑問問題をグループ学習で展開。問題の多い問題や解答パターンが二つ以上ある問題を扱う上で、各グループ（4人1グループ）で、得意な人が得意な方法により、得意な学生、さらに、クラス全体でのグループの解答を知る（気づき）ことにより、学習の深まりをもたせることを目指しています。

授業の流れ…

- ① 教員が一つの問題を説明し、グループ内で4人がリレー方式でホワイトボードシートに解答（記入）していく（問題を並べ、その解答を書き添える。解答が必ずしも正解でなければ、グループ内で議論し、その解答を修正する。）
- ② 各グループで解答したホワイトボードシート（1日1枚）を一言で問題の解答、自分たちのグループの解答を他のグループの解答と比較する。
- ③ 教師が得意な学生を指名し、生徒の発表（説明）する。解答パターンが一つではない場合は、それぞれの解答について得意な生徒が発表する。解答が正しいと思われるものは、クラス全体で披露する。
- ④ 発表が終わった後、自分の立場に照らして、各3、4人に意見を求める（学びの時間）。その後、問題を次の問題で、今度は自分で解く。



*学校資料を編集部が一部改編

た生徒は左手を挙げるなど、明確に意思表示をさせる場合もある。

「数学が好きになる最大のポイントは『分かる』ことだと思います。授業中に、1人でも分からない生徒がいれば、それは自分の責任です。教師が一方的に教えるだけの講義形式の授業ではなく、ALを駆使したきめ細かい指導を行うように心がけています」（大口先生）

英語科では、教師間で「使える英語を身につけさせる」という目標を共有し、コミュニケーション中心の授業に取り組んでいる。読解や解釈の時間をできるだけ減らし、英文を

覚える時間を共通して取っている。英文を個人で覚えた後、ペアワークでの確認を行うが、長い英文の場合は、英文の語順に合わせて日本語訳を書いたプリントを見ながら話させることもある。

入試対策の問題演習に取り組む場合も、例えば選択式の問題では、答えの選択肢はどれか、答えから除外した選択肢はなぜ違うのかといった議論をペアで行う。英語科の瀧川恭子先生はそのねらいをこう語る。

「相手に分かりやすく説明したり、説明が上手な生徒の話の話を聞いたりすることで、より理解度が増します。

問題演習のような、これまで家庭学習で取り組むことが多かった内容を仲間と一緒に行うことで、学習への意欲がさらに高まるのだと思います」

物理
個人↓グループ、全体↓個人の活動で理解を深める

物理の授業では、「答えに至るまでのプロセスを大切にしています」と、物理担当の小野先生は話す。実験はそれ自体が活動的ではあるが、実験の計画書の作成、仮説の検証など、より探究的な要素を取り入れて、生徒の興味・関心を引き出している。

実験計画書を書かせる際には、実験の目的（例えば、摩擦力の大きさは何によって決まるのか）だけを伝え、実験の方法や工夫について4人1組のグループで話し合う。作成した計画書は教師が確認し、改善が必要なものについては修正させてから実験に臨ませる。

「日常生活や学んだ知識を基に、自分で実験をデザインする力を育てるのがねらいです。時間はかかりますが、実験の目的や手順がより明確に意識されるようになり、効果がある

と思います」（小野先生）

仮説を考える際は、実験方法を伝えて結果を予想させる。例えば、糸の長さやおもりの質量を変えたら振り子の周期はどう変わるかなど、思考過程を問に挟むことで、実験に向けた意欲を高めるのである。

問題演習でも、グループ活動を取り入れている。単元を一通り学習した後、間違いやすい問題や解法が複数考えられる問題を取り上げ、まず個人で考えてからグループで話し合わせる。その後、各グループに発表させて、解答を学級全体で共有し、協議する。そして、その内容を個人でノートにまとめて知識を整理してから、応用問題に取り組む。個人からグループへ、学級全体からもう一度個人へ、という過程の中で理解を深め、確実な定着を図るのである。

地理
資料の読み取りをグループで行い、思考力を育む

地理ではここ数年、センター試験の得点が伸びないという結果が続いた。新聞を読まず、現代社会の課題などを知らない生徒が多く、知識を

与えても期待するような結果が出なかった。

そこで、資料の読み取りを授業の中心にし、思考力を育む指導に切り替えた。例えば、ヨーロッパで鉄鋼業が盛んな都市はどのような場所にあるのかを考えさせ、なぜそこにあるのかを話し合う。議論の前提となる知識は、あらかじめ教師が解説し、その内容をペアで説明し合わせることで定着を図る。その後、テーマについてグループで話し合い、根拠となる図表やグラフ、写真などを教科書や資料集から探し出し、見解をまとめて学級全体で発表する。

取り組み始めた15年度の前期は、新しい進め方に生徒が慣れていないこともあり、授業がなかなか進まず、授業アンケートでも、「なぜ、こんなことをするのか」「センター試験に間に合うのか」といった声も上がった。しかし、回数を重ねるにつれ、生徒が主体的に考えるようになり、最終的には、授業は例年以上に速く進み、不満の声もなくなった。地理担当の磯部真実先生は手応えをこう語る。

「進研模試で成果が出て、生徒がこの授業で間違いないという確信を持たせたことが大きかったと思います。生徒が自分たちで答えを導き出すことの面白さに気づけば、おのずと主体的に考え始めることに改めて気づかされました」

生徒の競争意識を刺激し 切磋琢磨する雰囲気醸成

ALの導入と併せて、学年団が意識してきたのが、生徒に良い意味での競争意識を持たせることだ。

英語では、上位層向けのAコース1クラス、それ以外のSコース2クラスを用意して、生徒が希望のコースを選べるようにし、国語は、主に成績でコース分けをしている。また、数学では、より学力に見合った授業を受けてもらうために、A1・A2・Sの3コースを設けて成績順に振り分け、授業内容や課題のレベルもコースごとに変えた。定期考査の結果での入れ替え制にし、「上のクラスに行きたい」「成績が下がって悔しい」といった思いを抱き、学びに向かう生徒が増えたと、大口先生は語る。

「本校の生徒は、行事でもほかのクラスに負けないう熱心に取り組み雰囲気があります。分かる楽しさを感じさせたり、ほかの生徒と切磋琢磨させたりすることで、生徒のエネルギーを学びに向けさせたことが学力向上に結びついたと思います。ALが効果を上げているのも、仲間の優れたところを間近に見ることで、『自分も頑張ろう』といった意識が高まるからではないでしょうか」

授業の最後に難しい問題を出すと、休み時間に生徒が教室の後ろの黒板を使って問題を解き合う風景が日常的に見られるようになった。それも、生徒同士で切磋琢磨する雰囲気ができているからにはかならない。

全ての教師がALを導入し 授業満足度が向上

ALを取り入れた授業への生徒の評価は高く、年度末のアンケートでも、「目標の明確さ」「説明や指示の分かりやすさ」「思考の深まり」「つまずきへの対応」など、いずれの項

目も4点満点中3点以上であり、後期の数値は前期より上がっていた。

教師の意識も大きく高まった。15年度末の調査では、ALを取り入れた授業を「ほぼ毎時間行なった」教師は全体の6割に及び、一方で「全く行わなかった」教師はゼロだった。

「職員室での会話も授業に関する話題が増えており、日常的に指導改善を意識している様子がうかがえます。先生方が変われば生徒も変わるといふことが、この2年間の取り組みから見えてきました」(豊岡校長)

全校体制による授業改善で学力向上を成し遂げた岡山芳泉高校。今後の課題は、ALの教育効果を検証する指標の開発だと、小野先生は言う。

「単に活動させた、生徒の意欲が上がったということではなく、実際にどういった活動が学力向上に結びついたのかというところまで検証できて初めて、ALが成功・普及したといえます。形だけで終わらないように、取り組みの効果を客観的に検証する手法を考え、さらなる授業改善につなげていきたいと思っています」

ハートを
こがせ!

Vol.07

愛知県・私立名古屋中学校・高校

文学部

17音の自由のために 高校生活を大切にし、 ひたすらに句を詠む

数百年の時を経た和本に触れ、
今の自分を物語る小説を書く

名古屋中学校・高校の文学部の活動は、古典研究部門と近現代部門の2つが柱となっている。古典研究部門では、江戸時代に印刷・製本された和本を実際に手にして、内容を読み解き、古書の来歴を調べ、論文にまとめる。薄く、柔らかな和紙の手触りなど、教科書やインターネットでは味わえない本物に接することができる活動だ。

「和本で描かれている世界は、今とは全く違う世界ですから、内容を読み解く時も、僕らの常識が通用しないんです。変体仮名などの読めない字もたくさんありますから、誰が何のために、何を書いたのか、未知の世界を考察するのが楽しいです」
(鈴木さん)

また、近現代部門では、生徒が小説を書き、さらに誌面の組版から表紙の装丁までも自分たちの

手で行い、文学部部誌である『文学帳』としてまとめる。スケジュールと格闘しながらも、ものづくりの感動を味わえる活動である。

「小説を書くのは大変ですし、みんなが期限内に完成させられるわけではないので、本作りは苦勞ばかりです。でも、本が完成するとやっぱりうれしい。つらいことがたくさんあるほど、その分、喜びも大きいことが分かりました」(宮地さん)

高校生活を豊かにすることが
良句との出会いにつながる

古典研究と近現代のいずれかの部門に所属しながら、全ての生徒が取り組むのが俳句作りだ。4年前、初めて俳句甲子園の地方大会に出場した時は、俳句の決まり事もよく分かっていたいままでの挑戦で、審査員に「君たちの俳句は破壊的だ」「全国大会に出場できるレベルになるまで、10年はかかるだろう」と酷評された。しかし、生徒たちが

教師の思い

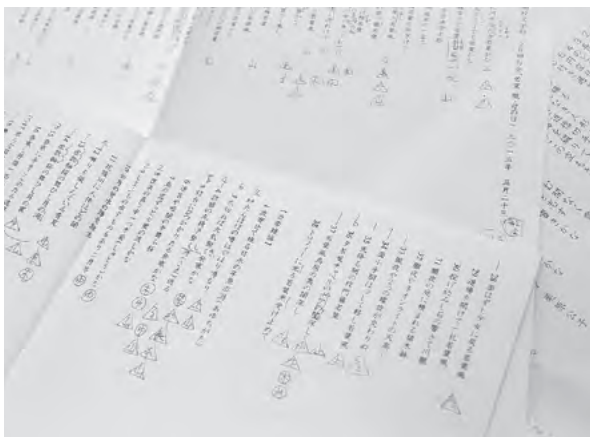
個性を輝かせる中で、
責任感や他者性を
育んでほしい



愛知県・私立名古屋中学校・高校
水野大雅
みずの・たいが
教職歴18年。同校に赴任して16年目。
文学部顧問。国語科。

「勝てるチーム」をつくるのが
大切なのではない

俳句甲子園全国大会準優勝の強豪校がいる愛知県で、俳句作りに取り組んでわずか3年、しかも古典研究や小説執筆も行いながら、全国制覇を果たしたのはまさに奇跡です。だからこそ、今の生徒たちも「今年も全国へ」というプレッシャーを感じています。しかし私は、勝つことだけを優先しなくありません。これからも二足のわらじを履いてもらいたいし、俳句甲子園のチーム分けも単なる上手、下手ではなく、それまでの作句量、つまり、努力の跡で決めたというのが今の私の考えです。俳句は、何百と詠むことで少しずつ上達するものがあることは生徒も分かっていますし、そうした努力をしてきた人ならば、みんな納得



日曜の夜まで作った俳句を、水野先生にメールで送る。先生が、誰が作った俳句かわからないように一覽にしたものを使って、みんなで一句ずつ批評していく。たくさんの句を作ることは、自分の作句力を高めるだけでなく、仲間の鑑賞力を向上させることにも通じる。

俳句作りをやめることはなく、結果、その2年後には、地元の強豪校を破って全国大会に初出場し、翌年には全国大会優勝の栄誉をつかんだのだ。

今の部員たちは、古典研究と俳句、近現代と俳句と二足のわらじを履きながら、全国大会優勝校としてのプレッシャーと戦い、3年連続の俳句甲子園全国大会出場をねらう。

「俳句の強豪校には、俳句とほかの活動を両立している生徒が意外と多いんです。俳句は自分の世界観を表現するものですから、高校生活でいろいろなことを体験しないと高校生らしい俳句は作れません。古典研究や小説執筆での経験が俳句作りで役立つことはきつと思えます」(北口さん)

「自分たちも先輩たちのように全国大会に出場で

きるのか、本当はとても不安です。でも、僕はその不安はなくすることが出来るものではないと思っています。できることは、とにかくたくさん俳句を作って、自分に自信をつけることです」(宮地さん)

高校生活を満喫し、1000句、2000句と詠むことで、駄句から良句が見えてくる……日本一をつかんだ先輩たちのように。

待春や十指に包む親子井
流星を待つや宇宙は成長す

さらはれるために亀の子波を待つ

※いずれも「待」の一字を詠み込んだ2015年度俳句甲子園決勝での同校の句

言葉と自分を磨き抜いた先にあるのは、わずか17音の「魂の自由」だ。

鈴木慎之介

すずき・しんのすけ

2年生。部長(古典研究部門担当)。

宮地雄也

みやじ・ゆうや

2年生。部長(近現代部門・俳句部副担当)。

北口直敬

きたぐち・なおたか

1年生。近現代部門に所属。部誌『文學帳』編集長。

して認めることができるでしょう。

どの生徒も個性的で、熱中すると周りが見えなくなり、時には自分の意見を押しつけようとして、衝突することもありますが、しかし、それでも仲間と同じ目標に向かっていくうちに、「このままの自分ではいけない」と理解し、少しずつ変わっていくのです。俳句甲子園への投句でも、「この句でいいのか」と議論が続きます。「このままでは、自分はこの句を守れない!」と感情をあらわにする生徒もいます。時間の許す限り、より良い句を求めて議論すればよいのです。しかし、それでも最後は決断し、「みんなの句」として守らなければいけません。

生徒たちは文学部の活動で、「個性的な仲間が集まるから面白い!」と実感しながら、責任感や他者性を育んでいるのです。

愛知県・私立名古屋中学校・高校

◎「敬神愛人」を建学の精神とし、キリスト教精神に基づく人間教育を行い、社会に貢献できる指導者たる紳士の育成に取り組む。文武両道を標榜し、厳しい学習指導を実践する中で、部活動にも積極的に参加できる体制を築く。

◎設立 1887(明治20)年

◎形態 全日制/普通科/男子

◎生徒数 1学年約470人(高校)

◎2015年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、東北大、東京大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大などに142人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ1278人が合格。

◎URL <https://www.meigaku.ac.jp/>

授業を進化!

思考を深化!

11:55 授業開始



授業開始と同時にプリントを配り、「グループにして、分からなかったら誰かに聞いて」と一言。生徒たちは4人グループをつくる。なお、荻戸先生は授業前に、黒板の端にヒントとなる公式などを板書しておく。生徒も、行き詰まった時は、そこを見れば解法の糸口が見つかることを理解している。

●この日は2年生「数学Ⅱ」の授業で、高次方程式の解法について学習。同校の生徒の実態に対して問題のレベルが高いため、行き詰まる生徒は少なくないと予想された。ほかの生徒に聞いたり、過去に取り組んだプリントなどを見たりしながら、高次方程式の解を明示した時の特徴に気づくことが本時の目標だ。(P.27に授業デザインを掲載)

実践 アクティブ・ラーニング

数学

個々の学びのペースを
尊重したグループ学習で、
「学びの感動」が口をつく授業に

荻戸先生のアクティブ・ラーニング

個々の生徒が

自分のペースで学ぶグループ学習

荻戸先生の授業の特徴は、先生が全体に対して言葉を発する場面が少ないことだ。この日も、プリントを配り終わると「分からなかったら誰かに聞いて」と言ったきり、その後20分ほどは、先生が全体に言葉をかけることはなかった。一方、「分からなかったら誰かに聞いて」と



群馬県立伊勢崎工業高校

荻戸貴利 のぞきど・たかとし

教職歴11年。
同校に赴任して6年目。
群馬県立前橋南高校を経て伊勢崎工業高校へ。
アクティブ・ラーニングの実践は、
前任校から始めて7年目になる。

群馬県立伊勢崎工業高校

- ◎2万名を超える卒業生が地元・伊勢崎や群馬県を始め、全国のものづくりの分野で活躍。部活動でもインターハイ出場やロボコンテストに入賞するなどの成果を上げている。
- ◎設立 1910(明治43)年
- ◎形態 全日制・定時制/機械科・電子機械科・電気科・工業化学科・工業技術科(定時制)/共学
- ◎生徒数 1学年約200人(全日制)
- ◎2015年度進路実績(現役のみ) 進学は、群馬医療福祉大、工学院大、東海大など4年制大に19人、各種専門学校に55人。就職は、日野自動車(株)、富士重工業(株)、群馬製作所、三菱電機(株)、群馬製作所などに122人。
- ◎URL <http://www.nc.iiko-hs.gsn.ed.jp/>

*プロフィールは2016年3月時点のものです

12:05 机間巡視



グループの中でうまく質問ができない生徒を中心に、先生が声をかける。プリントの書き込みを見るだけでなく、生徒のつぶやきを拾い上げながら、グループ学習の時間を判断していく。この日は、粘って考える生徒が多かったので、当初の予定よりもグループ学習の時間を延ばした。

12:00 グループ学習



「分からなかったら誰かに聞いて」という先生の声でスタートした授業だが、最初はほとんどの生徒が独力で問題を解く。だが、2、3分が経過すると、次第にグループ内で話し合う様子が見られた。1つのグループの中には、話し合う生徒もいれば、黙って考え続ける生徒もいる。

「マジかよ」「そうかー!」「美しいー!」 学びの感動がこぼれる授業

授業が後半に入ると、プリントの2問目に取

言われた生徒たちも、最初は話し合うことなく、各自問題に向き合う。そして、2、3分が過ぎた頃から少しずつ話し合いの音が聞こえ始める。だがその後も、1つのグループの中に、教え合う生徒もいれば、相変わらず1人で解き続ける生徒もいる状態が続く。荏戸先生は机間巡視の間も、「そこから先が分からないのなら、前にやったプリントがヒントになるよ」などと個別に声をかけるのみ。結局、この日先生が最初に全体に対して説明したのは、プリントの1問目の解答を1人の生徒が板書し終わった時。授業開始からおよそ20分が経過していた。

「生徒の集中を乱さないためにも、余計なこととは話しません。私がすべきことは、全体の進み具合の把握と、グループの仲間にどう質問してよいかも分からずに困っている生徒に声をかけることです」

そもそも1人で問題を解いたり、話し合いをしたりしている最中に教師が全体に声をかけても、目の前の作業に没頭している生徒には、教師の声はあまり届かないと言う荏戸先生。そのため、グループ学習中に全体に声をかける時は、一度作業を中断させ、きちんと自分に意識を向けさせてから話すようにしているという。

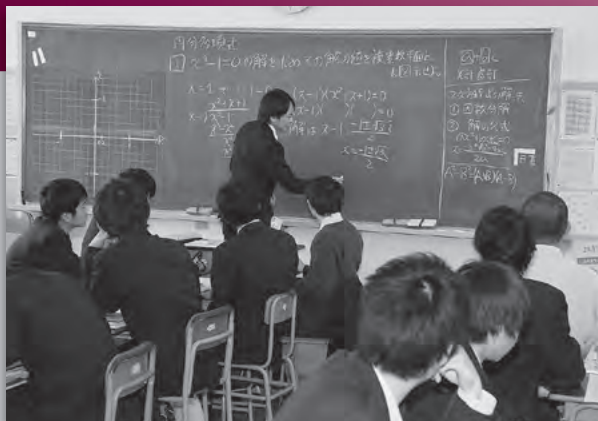
り進むよう、荏戸先生が指示する。1問目よりも難しい問題であることがすぐに分かったのか、何人もの生徒が「マジかよ」「やべえ」と小声でつぶやくが、すぐにそれぞれのペースで問題に向き合う。だが、今度は1分が過ぎた頃から生徒たちは話し合いを始めた。これ以上独力で解こうとしても難しいと判断したのだ。

ほとんどの生徒が苦戦していると判断した先生は、全体に「この黒板のどこかにあるヒントを使えば解けるよ」とアドバイス。再び生徒はグループで話し合う。その後、指名された1人の生徒が、発見したヒントを使って式変形を板書すると、「そういうことか!」とあちこちから声上がる。そのような反応こそ、生徒たちが授業に没頭している証だ。

それ以降、生徒に分かるころまで板書させ、全体で生徒とやり取りしながらポイントを引き出し、さらにその続きを生徒たちに考えさせるという工程が続いた。

「1問目の問題を解き終わるのに時間がかったこともあり、授業の最後は当初のプランを変更しました。授業計画はありますが、生徒の状況を見て柔軟に変えるべきものだと思います。従来型の講義形式の授業であれば多くの問題をテンポ良く解いて見せることができませんが、それで生徒が学んでいるとは限りません。教師の指導計画ではなく、生徒の理解の速度に合わせて授業を進めています」

12:15 先生の解説



解を求めることはできたが、その解の値を図示することができた生徒は半数くらいだったため、全体で生徒とやり取りをしながら用語の意味を確認した。途中まで解説し、続きは再びグループで考えさせる。そしてそのあとは、さらに別の問題を使って、同様の活動を繰り返し、この日は2問の大問を扱った。

12:10 生徒が解答を板書



1人の生徒に解答を板書するように指示。荻戸先生は、「数学は苦手だけれど解を出すところまでたどり着いた生徒」を選ぶようにしている。難しい問題では、1人の生徒に分かったところまでを板書させ、その続きは別の生徒に板書させることもある。

解を求めることはできたが、その解の値を図示することができた生徒は半数くらいだったため、全体で生徒とやり取りをしながら用語の意味を確認した。途中まで解説し、続きは再びグループで考えさせる。そしてそのあとは、さらに別の問題を使って、同様の活動を繰り返し、この日は2問の大問を扱った。

授業のクライマックス、高次方程式の解を示した時のその形状を理解した生徒に、荻戸先生が「みんな、どう思う？」と尋ねる。生徒たちは笑顔で「美しい！」と決めぜりふをそろえたところで、終業のチャイムが鳴った。

思考の活性化・深化への配慮

グループ学習中の生徒の言葉に耳を傾けて授業を動かす

荻戸先生の授業は、生徒がじっくりと考えているにもかかわらず、一部のアクティブ・ラーニングに見られる「慌ただしさ」がない。

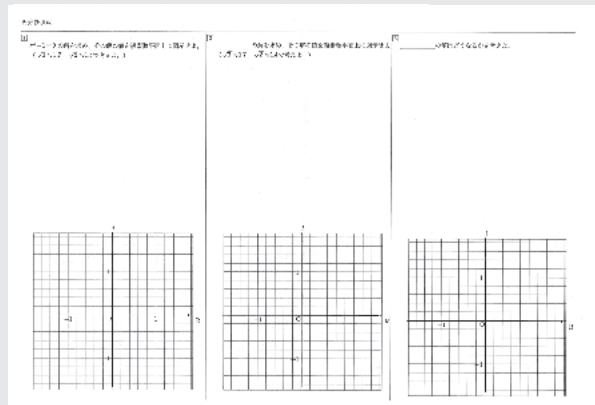
「それは、その日の授業内容を絞り、ゆとりを持って生徒に考えさせているからでしょう。問題数や活動内容を増やすぎると、時間に追われてせわしなくなってしまうし、生徒の状況を把握する余裕もなくなります。私はいつも授業展開を生徒の状況に合わせて選んだり、組み合わせたりしています。想定した授業計画の実現にこだわって時間を区切るなど、時間優先が進めると、途端に教室は慌ただしくなります。時間を守ることが大切なのではなく、生徒が熟考できる環境をつくるのが大切です」

生徒の状況に合わせて柔軟に対応するためには、生徒がグループ学習中にどんなことを話しているのかに耳を傾けることが重要だと荻戸先生は語る。

場づくりへの配慮

自立の準備としての依存を生徒に勧める

「グループ学習をこのまま続けた方が思考が深まるのか、私がヒントを与えた方が思考が活性化するのか、生徒の状態を読み取ることがアクティブ・ラーニングを進める上でのポイントだと思っています。私も当初はその点に気がつかず、生徒の学習状況を見取ることがおろそかになったり、集中して取り組み続けさせることができなかつたりしたことがありました」



生徒が学習内容を見通せるように、プリントには取り組む予定の3問を掲載。ただし、得意な生徒が先に進み過ぎると、苦手な生徒が質問しにくくなるので、この日はあえて問題の一部を隠し、授業中の足並みがそろえるようにした。

授業デザインシート

【教科・科目】 数学Ⅱ

【設定時数】 4時間 3/4時

【分野・単元】 複素数と方程式 (高次方程式)

【本時全体の目標】 $x^n - 1 = 0$ の解の特徴とは何か?

【テーマ・作品】 円分多項式

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
$x^3 - 1 = 0$ を解く。	課題を解決する力	技能	生徒: 4人グループをつくり、配布されたプリントを考える。 教師: 「分からなかったら仲間に聞くよう」発言する。 複素数平面について、ほぼ全員の生徒が理解できない場合は、全体に戻して確認する。半数程度であれば、各グループごとに過去のノートや資料を見させる。	複素数平面について学習したプリントは持っている? どこを見たら分かる?	【生徒の発言】 3次方程式の解き方はどうするんだっけ? 解はいくつ? 解は1でいい? 引き算だと符号が変わるよ。2次方程式の解の公式は? 割り算しても0にならない。おかしい。どこが間違っている?
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	生徒: 分からなかったら仲間に聞く。聞かれた生徒は自分の考えを説明する。 教師: 仲間に聞けない生徒や、分からないで固まっている生徒のもとへ行き、ほかの仲間に聞くように支援する。		じっとプリントだけを見ている生徒 分からなくて固まっている生徒
	解答を共有する。	多様性	生徒: 3次方程式の解法がいくつかあれば、それを板書させる。 教師: 多くのグループが終わっている場合は次に進む。		数学が苦手な生徒を中心に活躍させる。
$x^6 - 1 = 0$ を解く。	課題を考える力	思考力	生徒: 4人グループをつくり、配布されたプリントを考える。 教師: 「分からなかったら仲間に聞くよう」発言する。 課題について、ほぼ全員の生徒が理解できない場合は、全体に戻してできないことを共有する。 問題を解くための手がかりを見つけさせる。	黒板のどこかに問題を解くためのヒントがあるので、よく見て。	【生徒の発言】 これは全く分からん。6次方程式って解けるの? 解はいくつ? 解は1でいい? 割り算したけれどこの先が分からない。割り算しても0にならない。おかしい。どこが間違っている?
	課題を解決する力	技能	教師: 手がかりを生かした生徒の考えを取り上げ、板書させる。	この式を見てどう思う?	【生徒の発言】 あー、なるほど。なんでああなるの? よく分からない。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	生徒: 分からなかったら仲間に聞く。聞かれた生徒は自分の考えを説明する。 教師: 仲間に聞けない生徒や、分からないで固まっている生徒のもとへ行き、ほかの仲間に聞くように支援する。		じっとプリントだけを見ている生徒 分からなくて固まっている生徒
	解答を共有する。	多様性	生徒: 考えを板書する。		数学が苦手な生徒を中心に活躍させる。

以降は、生徒の状況に合わせて次の3つの授業展開を想定。

- 案1 ● $x^5 - 1 = 0$ の解をグループで考える。
- 案2 ● 本時から分かることは何かをグループで考える。
- 案3 ● 正六角形となる根拠をグループで考える。

※荏戸先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編。

「をモットーとしている荏戸先生。そのために、自身の授業では「分からない生徒から質問する」ことをグランドルールとし、生徒に周知している。

「4人グループにはなっていますが、もう少し1人で考えたいという時もあるけれど、これ以上考えるよりも早く話し合いたいという時もあるでしょう。その判断はそれぞれの生徒に委ねられていますし、生徒同士も尊重し合っています。だから、実際に話し合いを始めるタイミングはそれぞれ異なるのです」

だが、数学を苦手とする生徒が多い同校では、独力にこだわって頑張らせるよりも、人に聞くように勧めた方がよいと、荏戸先生は考えている。

「生徒を自立させるためには、いったん人に依存させることが大切だと、私は考えます。実際、数学がとても苦手な生徒が、1年生の授業では友人に聞いてばかりだったとしても、2年生になると、教科書の例題を1人で解けるまでになることはよくあります。数学が苦手な生徒は、最初は解答の糸口が分からないのですが、とにかく人に聞いていううちに、ヒントを得て、次第にどのように考えていけばよいかに気づきます。生徒なりに、数学の考え方、学び方を学んだのでしょう。だから私は、分からなかったり、困ったりしたら、人に頼りなさいと話しています」



岐阜県立
ぎなん
岐南工業高校

学力層別指導

学力層に応じた 組織的な指導で、 大学進学者数を伸ばす

◎1943年、岐阜市立工業高校として開校、56年に県立に移管し現校名に。2015年度、文部科学省「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」の指定を受ける。レスリング部やバレーボール部、自転車競技部など、全国区で活躍する部活動を多数擁する。

設立	1943(昭和18)年
形態	全日制／機械科・自動車科・電気科・電子科・建築科・土木科／共学
生徒数	1学年約280人
2015年度進路実績(現役のみ)	国立大は、信州大に1人が合格。私立大は、明治大、愛知工業大、中部大、名城大などに延べ29人が合格。短大、専門学校進学33人。就職は、川崎重工業、中部電力、東海旅客鉄道、トヨタ自動車などに175人。公務員3人。
住所	〒500-8389 岐阜県岐阜市本荘3456-19
電話	058-271-3151
Web Site	http://school.gifu-net.ed.jp/ginan-ths/

変革のステップ

背景

◎目的意識が明確な生徒が少なく、学力不足による大学進学後の留年・中退や就職試験の不採用など進路面の課題を抱えていた

STEP 1

実践

◎意識調査の結果に基づいて進路指導を拡充し、基礎学力向上に向けた学び直し、上位層のための理数コース・特進クラスの設置などを実施

STEP 2

成果

◎一般入試に挑戦する生徒が増え、特進クラスから国立大学合格者が出る。加えて、就職への意欲も高まった

STEP 3

山積する課題を前に
組織的な進路指導へと転換

ここ数年、岐阜県立岐南工業高校の躍進が著しい。信州大学や岐阜大学など、国立大学の合格者が毎年出ており、雇用環境の好転の影響もあって、就職実績も堅調に推移している。

同校が改革に着手したのは、藤原竹志先生が進路指導主事となった4年前のこと。当時、基礎学力の定着が不十分なことにより就職試験で不採用になる生徒や、大学進学後に授業についていけず留年・中退する者が出るなど、進路指導・学習指導の抜本的な改革が必要であった。

「本校には、中学校時代から学習習慣が定着していない生徒や、勉強が苦手な生徒が有るから工業高校を選んだという生徒もいます。そうした状況に対して、入学時から目的意識を持たせる指導や、大学進学後・就職後を支える基礎学力の定着に重点を置く、進学・就職に向けた組織的な指導体制の構築が急務となっていました」(藤原先生)

特に同校が課題として捉えていたのは、成績上位層の生徒への指導だった。早期から手厚い指導をしていけば伸びたかもしれない生徒や、より高い目標を掲げることでもっと頑張れた生徒もいたのではないかという思いから、それまで担任個々の力量や努力に頼っていた指導を、組織的・効率的に行うための改革に着手した。

生徒・保護者・企業を調査し 実態に即した指導へ

まず進路指導部が行ったのは、生徒の意識や進路先の実情などの把握だ。進路指導部の古家幸司先生は、その意図を次のように説明する。

「これまで本校には、データを指導改善に生かす体制がなく、生徒の意識や社会のニーズを感覚的にしか捉えていませんでした。学習や進学・就職に対する生徒の意識、不合格者の成績、不採用の理由などのデータを集めて分析し、生徒の課題に応じた取り組みを適宜行うとともに、効果が見られない指導はやめるなど、指導の効率化を図ろうとしました」
そこで、同校は生徒・保護者・企業へと次々



藤原竹志 ふじわら・たけし
岐阜県立岐南工業高校
教職歴32年。同校に赴任して10年目。進路指導
主事。電気科。「今日進まなければ明日も進まない。生徒の進むべき道の可能性を広げたい」



古家幸司 ふるや・こうじ
岐阜県立岐南工業高校
教職歴10年。同校に赴任して11年目。進路指導部
土木科。「常に生徒主体！」



林貴康 はやし・たかやす
岐阜県立岐南工業高校
教職歴11年。同校に赴任して5年目。進路指導部
機械科。「失敗を恐れず挑戦し続けたい」

に独自のアンケートを行った。例えば、生徒には、就職で重視することや進路情報の活用度、職業観などを聞き、進路意識の実態把握に努めた(図)。同校に求人が来ていた約200社には、生徒に何を期待しているのかなどを聞いた。

そうした調査の結果、1年生では就職先選びの条件として、仕事内容に次いで賃金体系や休日がきちんとして取得できるかなどを挙げる割合が高いことが明らかになり、働く意義を自覚させる必要があることが分かった。

「漠然と『大学に行きたい』『就職したい』
と思っただけでは、目標に向かって最後まで頑張り抜くことは難しいでしょう。何を

図 1年生の進路意識調査(抜粋)

進路適性の理解度 (%)	YES	どちらでもない	NO
A. 自分の特徴をつかんでいる	42.3	46.4	11.3
B. 自分の進路希望への適性が分かっている	33.9	49.6	16.4
C. 自分の能力の特徴を挙げることができる	32.8	49.3	17.9
D. 自分の体力・健康などの特徴を挙げることができる	62.4	29.6	8.0
E. 自分の性格・適性・能力・興味と進路先が結びついている	36.5	54.4	9.1
進路情報の理解と活用 (%)	YES	どちらでもない	NO
A. 必要な進路資料を自分で探せる	43.4	44.5	11.7
B. 産業や職業の種類や内容について調べている	32.1	31.4	36.5
C. 資格・免許の種類や取得方法について調べている	36.1	32.5	31.4
D. 希望の進路先の実際の様子を見学または聞くなどしている	17.5	30.7	51.8

上記以外に、「望ましい職業観の形成」「将来の進路の設計」についても、それぞれ5項目を設けて調査し、生徒の実態を把握した。

*学校資料から一部抜粋して編集部で作成

したいのか、目標を明確に持たせることが大切であり、早期に意識づけを行わなければならないと考えました」(古家先生)

1年生での進路行事を大幅に増やしたのは、そのためだ。将来像が明確ではない生徒・保護者を対象とした進路相談週間、保護者対象の進路ガイダンスなど、新しい取り組みも始めた。また、県内の自動車整備士が不足しているという地元ニーズを受け、2015年度には専門学校を見学する1年生対象のバスツアーも実施した。

さらに、社会人講話の回数も増やし、進路ガイダンスでは企業から講師を招くようにした。そうした外部人材の活用は、生徒の進路意識を刺激するだけでなく、教師が社会に目を向ける良いきっかけにもなっているという。

「社会人が共通して言うのは、『人のために働く』という言葉です。給料や休日を重視して仕事を決めていたのでは、すぐにやる気を失い、早期離職を招きかねません。『働く』ことをもつと掘り下げて考えられるよう、生徒の心に響く伝え方は何か。私自身、企業人の職業観から学んでいます」(古家先生)
教師が普段から生徒に話している内容が、講師の言葉で「先生の言うことは正しかった」というように、裏づけられることもある。学校外の人的リソースを活用することで、生徒・教師ともに、多角的に社会を見通す力を養っている。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

毎朝10分間の朝学習で 基礎学力向上を図る

学力層に応じた学習機会の提供にも力を入れた。就職試験で苦戦を強いられる成績中・下位層の生徒への対策として始めたのが、毎朝10分間の朝学習だ。当初は数学の独自プリントを、ベネッセの基礎力診断テスト(*1)の直前などに実施していたが、学習習慣の定着と落ち着いた学習環境づくりのためには毎日行う必要があると考え、3年前から全学年で実施している。1年生はベネッセのマナトレ(*2)の標準編、2年生は挑戦編に、3年生は学校独自の就職対策プリントに取り組み。学力向上の取り組みを主導してきた林貴康(たかひこ)先生は、次のように述べる。

「マナトレは級ごとのテストで認定証ももらえ、目に見える成果が出するため、生徒の学習意欲の向上につながっています。本校には、潜在能力は高いものの、周りに流されて学習を怠ってきた生徒が少なくありません。初めて学習に熱心に取り組んだ結果、自分が学習に向いていることに気づいて、学習が楽しくなる生徒もいます」

基礎力診断テストを年1回から3回に増やし、テストの3週間前には付属のテキスト「One-week Trial」に取り組むようにした。結果は、生徒に返却するだけでなく、校内での過年度比較、他校比較などの指標として蓄積し、

面談や進路選択の資料として活用している。

5教科7科目の授業時間を増やした 理数コースを新設

成績上位層の生徒の力をさらに伸ばす仕組みとして、理数コースを設置した。それまで、公募制推薦入試や一般入試で大学進学を希望する生徒には、担任が放課後補習を行うなど、志望に応じて個別に対応する場合が多かった。しかし、大学進学希望者が増加したため、従来の指導では担任の負担が大きく、対応しきれなくなり、組織的な指導体制を構築する必要が出てきた。さらに、国語や数学、英語などの大学入試に必要な教科・科目の授業時間が少ないことも課題だった。工業科における5教科7科目の単位数は、普通科に比べて延べ30単位ほど少なく、入試に対応できる力を育みきれいでなかった。

そうした課題に対応するため、2年生から、大学進学希望者を対象とした「理数コース」と、それ以外の「専門コース」に分けることにした。理数コースにおける5教科7科目の単位数は、普通科と同じ単位数になるほど増やし、専門科目を少なくした。科目によっては、1科目の履修者が少人数という場合もあるが、そのような教育課程を組むことで、進学志望者への指導体制を充実させたのだ。また、途中で志望が変わっ

た場合も考慮し、3年生で専門コースに変更できるような、柔軟に対応することが可能な体制とした。

「理数コースを選択すると専門科目が少なくなり、取得が難しい資格も出てくるため、保護者とも相談の上で履修計画を立てています。多様な学びの機会をきちんと用意し、進路選択の幅を広げてあげることが、我々の責務だと思っています」(藤原先生)

成績優秀者の表彰制度で 生徒が切磋琢磨する雰囲気醸成

さらに難易度の高い大学の志望者には、「特進クラス」を用意した。これは、希望者が参加できる放課後・土曜日の補習で、ウェブ教材で自学自習に取り組み、分からない箇所は教師に質問するというもの。あくまでも自学が基本であるため、学習に自ら取り組み意欲のある生徒でなければいけない。15年度は2・3年生合わせて20〜30人が登録。年度末には5、6人まで減ったが、最後まで頑張った生徒たちは、国立大学や私立大学の一般入試に次々と合格している。

成績上位者を対象とした表彰制度も整えた。各クラスで学期末時点での評定平均上位5人の生徒を表彰し、副賞として校章が箔押しされたノートを進呈している。

「『自分は上位層なのだ』というプライドを持ってもらうと同時に、良い意味でのプレッシャーをかけたという思いもありました。1度表彰されるとほかの生徒から一目置かれるようになり、簡単には成績を下げられなくなりません。『次も頑張ろう』『もっと上に行きたい』という意識が、自律的な学びに結びつくことを期待しています」(林先生)

「各クラス5人の表彰は多すぎるのではないか」という意見もあったが、上位3人にすると常に同じ顔ぶれになりやすく、表彰の対象が固定化する恐れがあった。5人とすれば、6位以下の生徒との入れ替えも容易にあり得ると考え、あえて5人とした。上位10人ほどの生徒の間に切磋琢磨する雰囲気を生み、それをクラス全体に波及させたいと考えている。

ICTを活用した授業で コミュニケーション能力を育む

一連の改革が同校に活気をもたらしていることは、冒頭に述べた通りだ。国立大学合格者の増加に加え、私立大学へも、3年前からは指定校推薦入試だけでなく、一般入試に挑戦し、合格を勝ち取る生徒が大幅に増えた。さらに、生徒の意欲の高まりを受け、15年度には、土木科の生徒が県内の高校で初めて「高校生ものづくりコンテスト全国大会」の測量部門で優勝する

など、課外活動でも成果が表れ始めている。その一方で、新たな課題も浮上している。学力不足による就職試験の不採用や進学後の留年・中退は減ったが、コミュニケーション能力不足のために不採用となるケースが増えているのだ。

同校は、この課題の解決に向け、15年度に文部科学省から指定を受けた「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」を軸に、新たな改革を進めている。学力とコミュニケーション能力の向上を目的として、ICTを活用したアクティブ・ラーニングや言語活動を授業に取り入れようと考えているのだ。その具現化に向けて、現在、タブレットや電子黒板の整備、教員研修

や公開授業などを行っている。16年2月の公開授業では、生徒が俳句に自分がイメージする曲や画像をつけ、編集意図を解説する言語活動を行った。今後は、様々な学習スタイルと組み合わせた協働学習に取り組んでいく予定だ。

「コミュニケーション能力の低下は、おそらく本校だけの問題ではないと思います。部活動で培う明朗・闊達さ、朝学習や理数コースなどで培う学力に、コミュニケーション能力や協働する力が加われば、本校の生徒への評価はさらに高まるでしょう。『未来のメー ド・イン・ジャパンを担うのは本校の生徒』という気概を持って、彼らの力を最大限に引き出す教育を目指していきます」(古家先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

仕事に線引きをせず、 今の生徒に必要なことを考える

進路指導部 林 貴康

長年、工業高校で指導していて感じるのは、生徒たちの可能性の大きさです。入学時には学習が苦手な生徒もいますが、専門技能の習得や資格取得のための勉強、部活動などに打ち込む中で、どんどん変わっていく姿を何人も見てきました。中学校までの苦手意識を克服し、わずか3年間で人生観を大転換させる可能性が、工業高校の学びの中には凝縮されていると感じます。

ここ4年間は進路指導部に所属し、朝学習や表彰制度など、様々な学力向上策を打ち出してきました。私はむしろ工業科の教師こそ、進路指導のノウハウを持つことが必要だと思います。工業高校の生徒に求められる力、大学入試の優遇制度などの情報を普通科の先生などに伝え、「この科目を重点的に指導してください」「口頭試問の対策をお願いします」などと、積極的に連携を図ることで、生徒の合格の可能性はさらに高まるはずです。

もし、ほかの分掌になったとしても、同じように学校を良くする姿勢で臨みたいと思います。今の生徒や学校に何が 필요한のかを考え、学習習慣の定着や意欲向上に課題を見だし、その解決のために何をすべきかを考えた結果が、一連の取り組みにほかなりません。大切なのは、所属先ではなく、目の前の生徒に何が 필요한のかを考えることです。これからも自分の仕事に線引きをせず、あらゆることに貪欲に取り組んでいきたいと思っています。



福岡県立
八幡高校

SSHを軸とした授業改革

教科の枠を超えて、 科学的な素地を持った 生徒を育てる

◎「誠」と「鏡」からなる和歌を校訓に掲げる。1991年に理数科を設置。2011年にはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定。創立100周年を控え、「古くて新しい学校」として進化を続ける。

設立

1919(大正8)年

形態

全日制／普通科・理数科／共学

生徒数

1学年約320人

2015年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、横浜国立大、神戸大、広島大、九州大、九州工業大、福岡教育大、長崎大、熊本大、鹿児島大、北九州市立大などに195人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、産業医科大、西南学院大、福岡大などに延べ213人が合格。

住所

〒805-0034
福岡県北九州市八幡東区清田3丁目1-1

電話

093-651-0035

Web Site

<http://yahata.fku.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎エリアの人口減に歯止めがかからない中で、学区の特性などから、学校の魅力の高め方と存在意義を校内で議論する必然性が高まった

実践

◎2011年度より指定を受けていたSSHの成果を土台に、時代が求める科学的素養を持った人材育成を授業改革の軸にする

成果

◎文理の枠を超えた複数教科のコラボレーション授業が始まるなど、知の統合化を進める機運が校内に広まっている

STEP 1

STEP 2

STEP 3

伝統を土台にした
新しい学校づくりが必要に

北九州地区の伝統校の1つとして、地域の評価と信頼を得てきた福岡県立八幡高校。学区の端に位置するという立地上の不利に加え、学区の人口減など、学校を取り巻く環境が大きく変化する中で、学校のあり方が校内で議論されるようになった。内村尚俊教頭は、創立100周年を間近に控えた八幡高校での、「伝統の継承とさらなる飛躍」に向けた機運を次のように説明する。

「これまで本校は、確かな進学実績で生徒や保護者の期待に応えてきました。今後は、5年間のSSHでの取り組みを土台に、科学的な思考力・創造力を備えた人材の育成を全教員が一丸となって進めることが必要だという目線合わせがなされました」

「科学智の統合」を掲げ、産学連携や高大連携を組み込みながら国際社会に貢献できる科学的素地を持った人材を育成する同校のSSHは、課題研究を柱に様々な活動を展開してきた(図1)。国内外で活躍する研究者の講演は、理科のみならず普通科の生徒も意欲的に参加した。2015年度に研究指定5年目を迎えたSSHの取り組みを基軸とし、変化する社会を生き抜くたくましい力を養うために、全教科・科目で科学的素養を養う――「古くて新しい学校」



三浦清武 みづら・きよたけ
福岡県立八幡高校
教職歴15年。同校に赴任して3年目。理数科主任。SSH推進班。「授業やHR活動を通じ、「人生は生きるに値する」ことを生徒とともに感じたい」



内田美穂 うちだ・みほ
福岡県立八幡高校
教職歴17年。同校に赴任して7年目。英語科主任。SSH推進班。「明るく前向きなリーダーシップと、コミュニケーション能力を身につけさせたい」



井手謙 いで・ゆずる
福岡県立八幡高校
教職歴20年。同校に赴任して3年目。SSH推進班総括。「自分の決めた目標に向かって、全力で努力し続ける生徒を育てたい」



上掛靖良 かみかけ・やすよし
福岡県立八幡高校
教職歴37年。同校に赴任して32年目。総務広報班。「言語文化の豊かさ、人生の面白さを伝えられる教師でありたい」



前田毅 まえだ・たけし
福岡県立八幡高校
教職歴30年。同校に赴任して1年目。進路指導主幹。「日々新たな自分を発見し、行動しようとする主体的な生徒を育てたい」



隼田和明 はやた・かずあき
福岡県立八幡高校
教職歴35年。同校に赴任して24年目。教務主幹。「手を動かし、頭を使うことで、知識を定着させ、思考力・表現力が向上する」



内村尚俊 うちむら・ひさとし
福岡県立八幡高校教頭
教職歴30年。同校に赴任して1年目。「心で考えて行動をするように心がける」

を標榜する八幡高校に新たなテーマが生まれたのだ。

文理の枠を超えた科学的素地の育成を目指して

科学的な素養を、教科の枠を超えた全校体制で育む。その思いは、八幡高校の教師にとつては、まさに「古くて新しい」ものであった。SSH指定初年度の段階で、課題研究に取り組む生徒の様子を見た隼田和明先生は、「数学、理科だけではなく、全教科で課題研究を行いたい」と校内で提案していたのだ。

「生徒の探究の様子を見ると、非常に多角的なアプローチだったので、より深化させるためには、数学、理科に限らず、多様な教科・科目の授業と連携することが必要だと感じました」(隼田先生)

しかし、一足飛びに理想を実現することは難しい。まずは、理数教科での地盤を固め、他教科との連携は、今後の課題とし

て持ち越された。それでも、教師が研究テーマを絞り込んで生徒に示すスタイルから、生徒が自由にテーマを設定するスタイルに変えるなど、同校のSSHは進化していった。

「学校行事で主体的に活動できる本校の生徒であればきつと自分で考えられると思う、課題設定の段階から生徒に任せるようにしました。生徒の力だけで課題を決めるためには数か月単位の時間がかかりますし、やっとテーマが決まったと思っても見直しが発生するなど、教師の間がかえって増えることもあります。それでも、自分が納得したテーマだ

図1 八幡高校 理数科SSHの概要

- 1 科学の素養を持ったグローバル人材を育成するカリキュラム**
探究科学技術リテラシー、科学技術英語など、生徒自らが積極的に参加し、自分の意見を発信しながら科学の素地を養う授業を展開
- 2 最先端の研究を行う研究者などを招いたSSH講演会**
過去には、東京理科大学の学長が、「酸化チタンにおける光触媒反応について」というテーマで講演
- 3 課題研究**
理数科2年生が数学・物理・化学・生物の分野に分かれ、自分でテーマを設定し、興味・関心のある研究に取り組む
- 4 出前講義**
4週にわたって、近隣大学を中心に高度な実験を1日2講座ずつ実施
- 5 筑波学園都市研修**
那珂研究所・筑波研究学園都市各研究所・宇宙センターなどを訪問し、日本の先端科学や技術に触れる
- 6 オーストラリア研修**
研究機関などで講義を受講したり、フィールドワークを行ったりした後、生徒が研修の成果を英語でプレゼンテーションする
- 7 近隣の動物園・博物館と連携した研修**
北九州市所管の動物園・博物館で、職員の講義及び動物の生態観察を体験
- 8 放射線セミナー**
九州大学大学院工学研究院エネルギー量子工学部門の教授らを迎え、講義と実習を体験

*学校資料から一部抜粋して編集部で作成

からこそ、生徒は主体的に探究を進めていけると思い、舵を切りました」（隼田先生）

複数教科のコラボレーションで 知の統合化を促進する

SSHスタート時に隼田先生の思い描いた教科連携の理想は、若い世代の教師が受け継ぎ、結実させた。八幡高校のSSHの歴史の中で、理数教科と他教科が連携した取り組みは着実に広がっていった。SSH推進班総括の井手謙先生は説明する。

「保健体育や英語が理数教科と連携して授業を行うなど、各教科の先生が、自分の授業の中でほかの教科の先生と協働しながら探究につながる授業を行うようになっていきます」
変化の裏側にあるのは、職員室などにおける教師間のコミュニケーションだ。例えば、英語で、発酵食品をテーマにした単元を扱った際、理科教師と英語科教師の職員室での雑談が契機となり、生物の実験をALTのサポートを受けながら英語で行った。授業に参加した英語科の内田美穂先生は、他教科の教師との連携が自分のスキルアップにつながったと振り返る。

「教科が違つと授業の進め方も異なるので、自分の授業スタイルを検証する良い機会となりました。また、英語の教科書では取り上げないような科学的なテーマを英語でどのよう

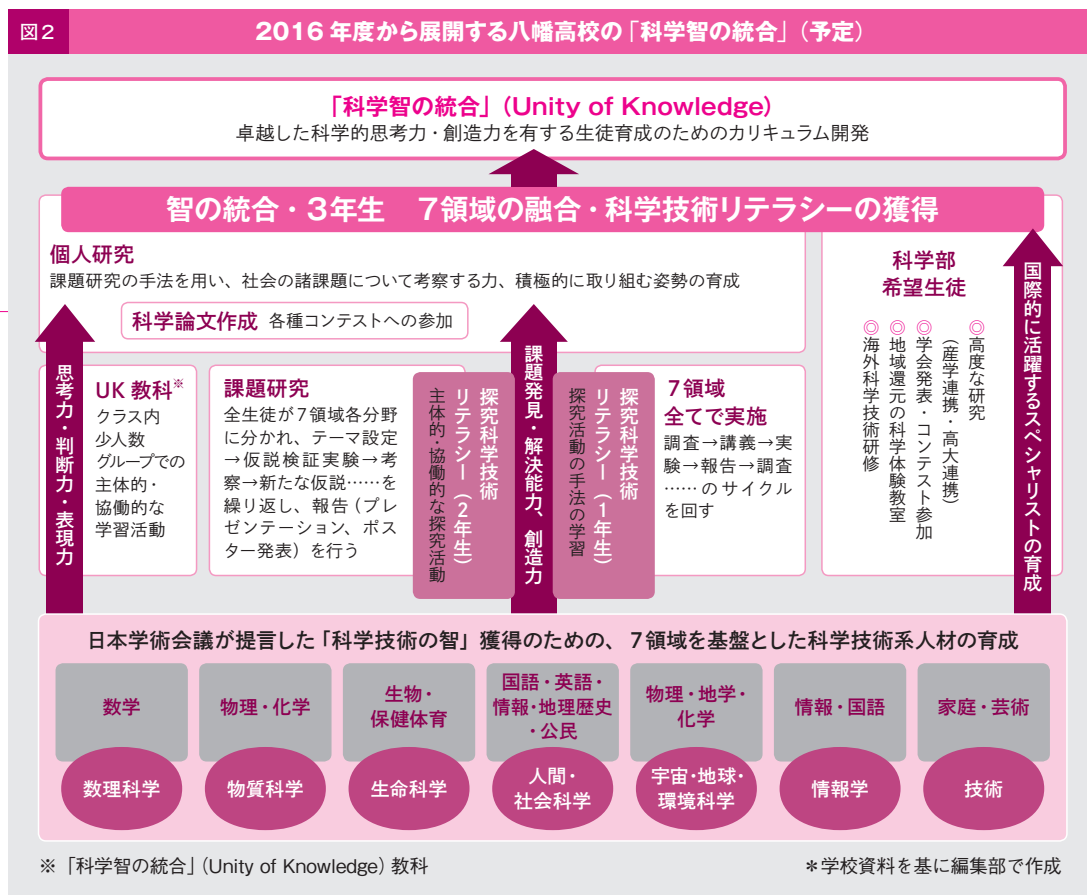
に説明するかも分かり、勉強になりました。今後、幸福度をテーマにした単元などで公民科や保健体育科、家庭科の先生と連携して授業をすれば、より

生徒の理解が深まるのではないかと考えています」

国語、地理歴史、理科の3つの教科の知識が統合化されるような授業も既に実現している。15年末、パリでCOP21（気候変動枠組条約第21回締約国会議）が開催された際、理数科ではパリ協定を題材にしたディスカッションを、地理歴史科と理科が連携して行った。その時の様子を生物担当の三浦清武先生がこう説明する。

「ディスカッションでは、いろいろな教科の先生が教室に来られたの

ですが、その中に国語科の上掛清良先生（かみかけ）の姿がありました。上掛先生に気がついた生徒たちも、授業を進める私たちに、「そういうえば、



国語の評論の授業で学んだ環境倫理学の考え方が、ここでは必要なのではないかと、現代文で学んだ視点を紹介し始めたのです」

上掛先生にとっても、地理歴史科と理科のコラボレーション授業内で、自分の授業が話題になることは予想外だったという。

「環境倫理学の中の世代間倫理という考え方が、COP21を議論する上で重要な視点だと生徒たちは気がついたようでした。生徒が国家間の経済的な利害調整という言わば2次元の世界に、時間軸という3次元の視点を持ち込んで、現代社会の問題を考えることができた瞬間に立ち会えました」（上掛先生）

アクティブ・ラーニング、ICTなど急ピッチに進む授業改革

SSHの実践と手応えを土台に、16年度から同校が創り上げようとしているのが、全教科で科学技術リテラシーを獲得するプログラムだ。

「本校のSSHは日本学術会議がまとめた『科学技術の智』を土台に、科学技術のリテラシーを身につけるための7つの領域を設定しています（図2）。これまでは、生命科学は生物、物質科学は物理と化学と、理系教科がその役割を担ってきました。16年度からは、全教科で科学技術リテラシーの育成に取り組みめるように、今はSSH推進班を中心に議論

を続けています」（井手先生）

内村教頭も5年間での環境変化を語る。

「本校が目指す教育に、時代が追いついてきたように感じます。各大学の入試が、生徒の探究活動を評価するものへと変わろうとしている今、全教科体制での課題研究は、生徒や保護者の期待に応える取り組みです」

環境変化に対応する校内整備も進んでいる。進路指導主幹の前田毅先生は、生徒が主体的に学ぶ授業づくりには、ICTを活用したアクティブ・ラーニングの導入が不可欠だと考える。

「本校は15年度中に全教室へプロジェクトIが設置される予定です。今は、ICTをどんな場面で使えば効果的か、校内研修を通して

て全教員が理解を深めようとしている段階です。教師同士で成功や失敗の経験を語り合う場をつくり、そこから本校に合ったノウハウを共有していきたいですね」

「本校の改革の全ては、生徒に学びの喜びを感じてもらうため」と上掛先生は考えている。

「いつの時代も生徒は自分の頭で考え、自分の言葉で表現することが楽しいのです。『アクティブ・ラーニング』で目指す授業は古くて新しい価値のあるものだと思います」

既に、八幡高校では全教科でアクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくりが行われている。SSHの取り組みと成果を土台にした全校体制での教育の活性化は、着実に進んでいる。

情熱 若手教師が語る、指導変革への

「学ぶ喜び」を追求するベテランの背中を追いかける

理数科主任・SSH推進班 三浦清武

八幡高校の強みは、ベテランの先生方の「生徒に自ら学ぶ喜びを味わわせたい」という思いがどんな時もぶれないことだと私は思います。本校に赴任してきた先生がすぐに気がつくのが、職員室でいつも笑顔で生徒の話をしているのがベテランの先生方だということです。若手や中堅に対しても決してネガティブな言葉をぶつけることはありませんから、新しい授業手法なども安心してチャレンジすることができます。今、大学入試や教科指導のあり方が大きく変わろうとしています。そんな中であっても、自分はとても楽しんで日々仕事をしていると実感しています。きっと教師間に世代や教科を超えた温かなつながりがあるから、不安を感じないのだと思います。

私は、教師になって6年が過ぎた時、「科学の最先端を学びたい」と東京大学大学院医学系研究科で2年間、勉強する機会を得ました。その時、日本を代表する発生物学者の先生に「高校現場に戻ったら、いろいろな科学論文を高校生に紹介したい」と思いを話したところ、「論文を読むことも大事だけれど、科学ってすごい！楽しい！と思える体験をたくさんさせてあげてください」と言われ、ハッとしましたことがあります。あの瞬間の気づきは今も私の授業の土台になっていますし、「学ぶことを楽しみ、肯定感を持ち続ける生徒を育てたい」というベテランの先生方の思いと、軌を一にするものだと思います。

ビフォー
アフター

1年生導入期 (4月から夏休み前まで)
学習計画・記録表

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、1年生の導入期に高校生としてふさわしい家庭学習の習慣を身につけるための「学習計画・記録表」について検討する。

検討会メンバー



富山県・私立
片山学園中学校・高校
森内梨絵
もりうち・りえ

教職歴7年。同校に赴任して8年目。進路指導部。国語科。「教育とは、生徒に未来の可能性を見つけ、育むこと」



埼玉原立
春日部高校
岡本眞一郎
おかもと・しんいちろう

教職歴33年。同校に赴任して2年目。進路指導部。英語科。「教師は生徒につくられる」「失敗は素晴らしいことの始まりかもしれない」



長野県
屋代高校・附属中学校
宇都宮 仁
うつのみや・じん

教職歴25年。同校に赴任して5年目。キャリア教育係主任。国語科。「生徒の『直観』と『情熱』を育てていきたい」

検討

現実的なモデルを提示しながら、
高校生への意識を定着させたい



森内 中高一貫校の本
校では、高校入試を経
験しないため、高校1

年生の段階で家庭学習の習慣が身につけていない生徒が少なくありません。個々の生徒の家庭学習の状況を把握し、早期に学習習慣をつけさせるために、ゴールデンウィーク（以下、GW）に向けて学習計画を立てさせています。ただ、計画表を活用し、自分の学習スタイルを見直しているのは、既に学習習慣が身につけている生徒が中心で、仕方なく計画表を書いているだけという生徒もいます。計画表を生徒の学習習慣の確立

につなげるもの、進んで書きたくなるものにしたいです。



宇都宮 本校も中高一
貫校ですので、高校入
試を経験していない生

徒に学習習慣が定着していかないことがあるという課題は理解できません。高校生になると、勉強や部活動、行事など、多くの活動をこなさなければならぬので、1日をどんなふうに通ごせばよいのかを自分で理解し、遂行することが必要です。高校生にふさわしい生活スタイルを模索しなければいけないということに気づかせることが大切ですね。



岡本 私たち教師は、
「平日の学習時間の目
安は、自分の学年+2時
間」などと言いますが、部活動に参

加する生徒にとって、その目安は現実的ではないかもしれません。「英語は予習中心で1日30分」「数学は復習中心で週末にまとめて2時間」「勉強時間ゼロの日はつくりたくない」など、生徒の参考になるような現実的なモデルプランを示したいですね。
宇都宮 入学当初から計画通りに家庭学習に取り組むのは難しいことです。本校では、高校生活に慣れてきた6月に個人面談を行い、平日と休日の学習計画表と1週間の学習記録を照らし合わせ、できたこと、努力していることを評価し、励ましています。夏くらいまでに、それぞれの

富山県・私立片山学園中学校・高校 森内梨絵先生 1年生導入期「学習計画・記録表」

記入例には、生徒に「高校生としてこういった生活を送ってほしい」という一例を提示する。それを参考に、上部には、1日ごとの学習の結果を記録していく。

教科ごとに、勉強する予定を生徒に記述させる。ここに書かれる内容は、各教科から出された課題が中心になっている。

1日を過ごしての反省を記述させる。GW明けに各担任が「学習計画表」を回収し、学習状況をチェックするが、生徒にフィードバックするかどうかは各担任の判断に任されている。

ビフォー

ねらいと機能

導入期時点で早期に学習習慣を身につけさせる

片山学園中学校・高校では、高校1年生に、左の「学習計画表」に学習計画を立てさせている。その記録から教師が生徒の日常を把握し、生徒自身も学習習慣がついているかどうかをチェックできるようにしている。GWに活用することで、教師の手から離れた状態で、どれくらい学習ができていたのかを客観的に見る。ただ、「計画→実行→振り返り→計画の修正」というサイクルが実現できているのは、既に学習のリズムが確立されている生徒が中心だということ。

課題と解決策

- 3 学習時間は1日単位だけでなく、1週間単位で捉え、週末を活用させる。
- 2 面談で、できたこと、努力していることを評価し、高校生への変化を後押しする。
- 1 多忙な高校生活の中で、どのように家庭学習を進めていくのか、できる限り生徒の実情に合ったモデルを提示する。

生徒に合った学習計画が立てられるように指導しています。

岡本 高校の学習の量とスピードについていける生徒を見ると、平日は無理をせず、時間に余裕のある週末に集中して学習していることが多いと感じます。目標とする学習時間を1週間単位で達成できればよいと考えた方が、計画倒れになりにくいようです。教師の理想ではなく、生徒の実情に沿った指導をしたいと思います。

森内 本校の場合、部活動に参加しているかどうか、あるいは通学生なのか寮生なのかで生活リズムは大きく違いますから、同じような状況の先輩の例を見せるなど、一人ひとりに合った現実的なモデルプランを提示したいと思います。

学校プロフィール

- 富山県・私立片山学園中学・高校
- ◎全日制/普通科/共学/1学年約100人
- ◎2015年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東北大、東京工業大、名古屋大、大阪大などに43人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ206人が合格。
- 埼玉県立春日部高校
- ◎全日制・定時制/普通科/男子/1学年約360人
- ◎2015年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、北海道大、東北大、東京大、東京工業大などに79人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ411人が合格。
- 長野県屋代高校・附属中学校
- ◎全日制/普通科・理数科/共学/1学年約270人
- ◎2015年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、北海道大、東北大、信州大などに125人が合格。私立大は、上智大、明治大、早稲田大などに延べ252人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ「学習計画・記録表」を改良! 次ページで紹介します。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

アフター

学習計画を立て、実行するにあたり、この時期には、どんなことが大切になるのか、1週間の目標として教師があらかじめ記入して配布する。また、学習モデルについては、「部活動の参加」「通学時間」などを踏まえて3、4パターン作成し、各生徒に合ったものを提示する。

学習計画・記録表

1週間の目標

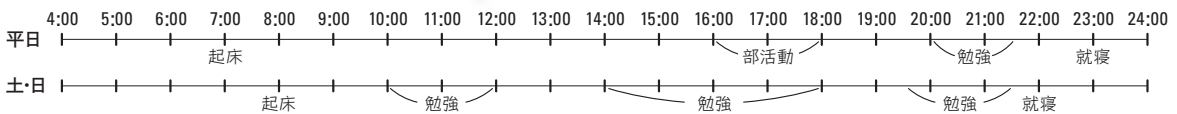
年 組 名 前

●1日の家庭学習の目安
1.5～3時間

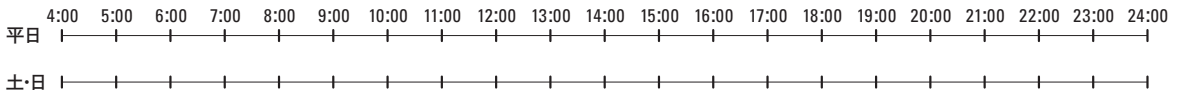
●1週間の家庭学習の目安
18時間

※勉強時間ゼロの日をつくらないようにしよう

■学習モデル（運動部の生徒の場合）



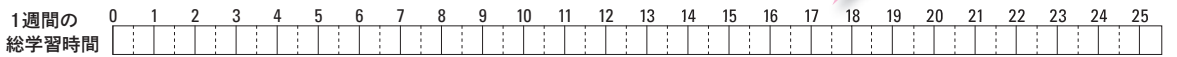
■学習計画



■1週間の記録

日	起床	就寝	家庭学習に取り組んだ時間帯（塗り潰す）	今日できたこと・良かったこと	1日の評価（○△×）
/	:	:	4:00 5:00 6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00 23:00 24:00		
/	:	:	4:00 5:00 6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00		
/	:	:	4:00 5:00 6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00		
/	:	:	4:00 5:00 6:00 7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00		

家庭学習に取り組んだ時間帯を1日ごとに塗り潰し、さらに家庭学習時間の合計を1週間単位で計っていく。また、起床時間、就寝時間を書かせて、生活リズムのチェックも行っていく。



1週間を振り返って

教師からのコメント

教師が記入

1週間を振り返って、できたこと・良かったことを確認する。後日、この内容を基に面談を行ったり、回収して教師がコメントを書き加えたりする。計画と記録を第三者が評価することで、学習へのモチベーションを高める。

また、生徒が1週間単位で学習時間を管理するためには、各教科からどんな課題が出て、それぞれ1週間で取り組むのにどれくらい時間がかかりそうかを月曜日の段階で見通しておく必要がある。それについて、森内先生から「進路指導部や学年で、各教科からどれだけ課題が出ているかを集約した上で、学習計画・記録表の裏面に一覧化することも考えた」といった案も出された。

なお、生徒の成長段階によって、家庭学習における課題は、「教科パランス」や「学習方法」などに変わっていくため、それに合わせて、学習計画・記録表の様式も変えていくことになる。

学習計画や記録が生徒の負担にならないように、記入する項目を精選した。この時期は、何を勉強したかよりも、毎日机に向かったかどうか、規則正しい生活リズムをつくりながら、1週間単位で家庭学習の時間を確保できるようにしているかが重要であると考え、起床・就寝時間や1週間の総学習時間の記入欄を新たに設けた。

改訂後のねらいと機能
1日を肯定的に振り返り、1週間単位で学習時間を管理



ビフォー アフター

活用

「できた」という達成感を持たせ、
学習への姿勢を前向きにする

岡本 まず、この時期の生徒に合った現実的な目標を明確に提示してみませんか。学校ごとに異なるでしょうが、1年生の夏くらいまでの目標は、「自宅ですぐ机に向かう習慣を身につけよう」「勉強時間ゼロの日はつくらない」といったことではないでしょうか。



宇都宮 この時期は、目標を明示してあげることで、学習習慣を確立する上での今一番大切なことを生徒が理解できると思います。「せめてこれだけは」と頑張ることで、時間をやりくりするコツも分かってくるでしょう。最初は、**家庭学習の時間の確保、次に学習の教科バランス、そして効果的な勉強方法など、徐々に目標をレベルアップさせていきたいと思います。**

岡本 1週間単位で学習の質と量を振り返らせるので、1日の振り返りは簡単なものでよいのではないで

しょうか。また、生徒が書きたくなる学習計画・記録表にするために、「学習時間メーター」を設けて、学習した時間を塗り潰させてはどうでしょう。学習時間が積み上がる様子がパッと見て分かるので、学習への意識が前向きになると思います。



森内 「今日はこれだけしかできなかった」ではなく、「今日はこれだけできた」と前向きに振り返らせたいですね。「今日できたこと・良かったこと」を書く欄があれば、さらにやる気が増すかもしれません。

宇都宮 他者からの励ましや、アドバイ스가あれば、人はさらにやる気になるものです。担任が肯定的なフィードバックを書き込む欄を設けることも、「生徒が書きたくなる学習計画・記録表」にするには欠かせない視点だと思います。

森内 例えば、2年生の先輩



が確認し、コメントするのも一案です。身近な存在である先輩の声には耳を傾けやすいでしょうし、2年生にとっては、自分の学習習慣を見直す機会にもなります。

宇都宮 本校では、4月の学習オリエンテーションで学習計画の立て方も教えますが、1回の説明だけでそれを生徒に身につけさせることは難しいです。そのため、10月頃には学習合宿等を行います。節目節目で繰り返し指導していくことが大切ですね。

岡本 各部活動の部長を呼んで、顧問と一緒に学習計画の立て方や週末の過ごし方などを指導し、それらを

「部員にも共有しなさい」と言うこともあります。学習習慣の確立は学力を伸ばすための大前提ですが、生徒にとっては決して簡単なことではありません。個人面談を含めた様々な場面での声かけやフィードバックを通して、着実に高校生へと育てたいですね。きっと、大学生や社会人になった時に必要な自己管理能力の土台づくりにもつながるはずです。

森内 「生徒のために」をしつかりと考えていくことで、いろいろな改善点が見つかるものですね。今回の検討会で得た気づきを学校に持ち帰って、さらに検討してみます。

活用の流れ

1 GWに入る前に、学習計画を立てさせる。その際、先輩の1日の学習モデルプランを例示する。

2 GWに学習計画を実行。実際に取り組んだ総学習時間を記録。計画と実際にできたことを比較し、学習計画の立て方や1日の過ごし方の改善ポイントを見極める。

3 GW以降に1、2を踏まえた学習計画を1週間単位で立案し、実行する。

アクティブ・ラーナーの育成を目指し、 文理混合クラスでの 協働学習を1年生で実施

九州大学 ● 基幹教育「基幹教育セミナー」「課題協学科目」

2014年度、九州大学では、初年次教育の一環として、「基幹教育セミナー」と「課題協学科目」を全学の1年生の必修科目として始めた。そのねらいは、アクティブ・ラーナーとしての素養を育むことだ。授業デザインでこだわったのは、1年生約2600人を文理混合のクラスに分け、学部・学科が異なる学生の少人数グループで活動する点。価値観が異なる他者との協働学習を経験させるとともに、「ものの見方・考え方・学び方」を学ぶ場としている。

対話、協働、内省の繰り返しで考えを深めていく

九州大学の初年次教育が、大きく変わりつつある。

2011年度、創立100周年を機に、次の100年を見据えた教育の構築に向けて、「基幹教育院」を設置。全学教育カリキュラムの「基幹教育」を14年度にスタートさせた。同大学が定義する基幹教育とは、「新たな知や技能を創出し未知なる問題をも解決していく上での幹となる『ものの見方・考え方・学び方』を学ぶ教育」だ。基幹教育院の谷口説男副院長は、次のように説明する。

「科学技術の進展が一段と速まり、最新技術がすぐに陳腐化してしまう現代において、1つの専門分野を究めた後も2つ、3つと強みをつくり、周辺領域の知識もより広く持つことが重要になっています。基幹教育では、『生涯学び続けることを幹に持つ、未知な問題や状況にも果敢に挑戦するスピリットと行動力を備えた人』、つまり、アクティブ・ラーナーを育成することを目指しています」

教養部の解体後、初年次教育に対



九州大学基幹教育院副院長、教授
谷口説男 たにくち・せつお
大阪大学大学院理学研究科修士課程修了。九州大学工学部助教教授等を経て、現職。博士（理学）。

する責任の所在があいまいになり、大学として初年次の教育方針が見えにくくなっているという課題もあった。基幹教育では、そうした課題も解決しつつ、アクティブ・ラーナーへと成長させるための端緒となるような初年次教育をデザインしたのだ。

大学での学びを 他学部生とともに考える

基幹教育の目玉は、全学部の1年生の必修科目である「基幹教育セミナー」と「課題協学科目」だ。どちらの科目も、文理融合のクラスとし、授業の内容は、少人数のグループワークと、初歩的なPBL（課題解決型学習）がメインとなる。

「専門性が深まっていない1年生でも学部・学科が異なれば、違う見方、違う考え、違う興味を持っています。そうした異なる他者との協働学習を

図1 「基幹教育セミナー」の概要

科目形態	1年生前期必修科目 1回1コマ90分
クラス形態	文理融合、1クラス約20人
担当教員	1クラスにつき教員1人
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 大学における学びへの意欲を高める 自らの学びが持つ可能性や意義について、自分なりの理解に基づく説明ができるようになる 仲間との対話や自己省察により、創造的、批判的に取り組み、学んでいく態度を培う 仲間（他者）と学ぶ意義について、自分の言葉で説明ができるようになる
授業のテーマ	大学での学びについて
授業の進め方	全15回のうち前半8回で、「学ぶ意義」について、教員の講義とグループ学習で考えを深め、自分の考えをまとめる。後半7回で、1人ずつ「自分の大学での学びについて」を発表。聞き手は発表に対するポジティブなコメントを書いて、発表者に手渡す。

*同大学の資料を基に編集部で作成

図2 「課題協学科目」の概要

科目形態	1年生前期・後期 必修科目 1回2コマ180分
クラス形態	文理融合 1つの教室テーマ約150人（50人×3クラス）
担当教員	1つの教室テーマに専門分野の異なる3人の教員
ねらい	幅広い視野をもって問題を解決する姿勢や問題の解決を目指す学び続ける態度と技能、専門性を異にする他者と協働できる能力を養う
授業のテーマ	3人の担当教員が、教室テーマに沿って、それぞれ異なる視点から、グループワークに適した題材を提供
授業の進め方	1つの題材は4週間分で完結。それを3人の教員分行う。1回の授業では、講義20分、個人演習、グループワークを実施。15回目に教室全体で発表する。

*同大学の資料を基に編集部で作成

図3 教室テーマと教員個々の題材例

教室テーマ	3人の教員の題材
これからの健康と医療と暮らしを考える	<ul style="list-style-type: none"> 健康・医療・暮らしを良くする仕組み 暮らしの中の生・老・病・死と医療 食の安全と健康
大発見の瞬間	<ul style="list-style-type: none"> 言語における大発見 物理における大発見 生物における大発見
知識と予測	<ul style="list-style-type: none"> リスクとの向き合い 社会における知識の活用 学問の盛衰を予測する

*同大学の資料を基に編集部で作成

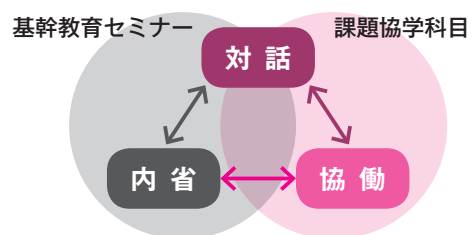
グループワークに充てている。授業の進め方にも特徴がある。1つのクラス（150人）を専門分野の異なる教員3人が担当。「教室テーマ」と呼ばれるテーマに沿って、3人がそれぞれ異なる「題材」を設定する（図3）。学生は50人ずつの3つの小クラスに分かれ、1つの小クラスで1つの題材に取り組む。それを4週間ごとにローテーションし、3つ全ての題材に取り組む。「学生は1つの教室テーマに対して、3つの切り口で課題解決に取り組むことになり。同じテーマでも、多様なアプローチの仕方があることに気づくでしょう」（谷口副院長）

体験するとともに、様々な気づきや刺激を受け、考えを深めていくことをねらいとしています」（谷口副院長）それぞれの科目内容を見ていこう。「基幹教育セミナー」では、教員や同級生から「大学での学び」についての考えを聞き、自分の考えも話しながら、大学での学びのロードマップを描く（図1）。少なからずいる第1志望以外の学生はもちろん、第1志望で入学した学生にも、入学初期の段階で学ぶことの意義を深く考えさせ、大学での学びをイメージさせることで、学習意欲の向上を図る。活動のキーワードは「対話」と「内

省」だ。全学部の1年生約2600人を、必ず文系・理系の学部・学科の学生が混在するように1クラス約20人ずつに分ける。志向の異なる他者との「対話」を通して、自分との違いを認識し、自分の関心はどこにあるのか、自分はどんな考えを持っているのかなどを「内省」しながら掘り下げていく。そして、授業の後半で、「自分が大学で学ぼう、取り組もうと考えていること」をテーマに1人ずつ発表する。自分の発表はもちろん、学生が力を注ぐのは、他者の発表の「傾聴」だ。発表者に対してポジティブ

なコメントをA4判の「リフレクトシート」に書き、本人に手渡す。これは、対話や協働で重要な傾聴の態度を身につけることに役立っているという。1つのテーマに3つの切り口からアプローチ「課題協学科目」では、初歩的なPBLを行う（図2）。志向の異なる学生同士が「対話」をしながら問題点を探し、それを解決する方策を探す「協働」を体験させることが、授業の目的だ。そのため、クラスは文理混合で、1コマの大半は個人ワークと

図4 2つの科目で回すサイクル



「基幹教育セミナー」では主に「内省」、「課題協学科目」では主に「協働」を、それぞれ「対話」をしながら自然と行うような活動を組み入れている。そのサイクルを回すことで、学生の内面を鍛えていく。
*同大学の資料を基に編集部で作成

以上のような2つの科目によって、他者に自分の考えを伝え、相手の考えを聞く「対話」、チームで一緒に活動する「協働」、活動や考えを振り返る「内省」のサイクルを繰り返しながら、学生はアクティブ・ラーナーの素養を築いていく（P.41図4）。

「基幹教育セミナー」の学生アンケートを授業前後で比較すると、「将来の目標と大学での学びを結びつけて考えることができる」58・5% ↓62・8%、「大学での学びを理解している」52% ↓68・6%と増加した。また、「課題協学科目」の学生アンケート（5段階評価）では、「話し合うことにより多様な観点から理解することができた」の回答の平均値は3・89、「文理混合のクラスでグループ学習するのが面白かった」が3・97と高評価だった。

「科目のデザインが機能し、その目的が学生にも伝わっていることが見て取れます。ただ、『課題協学科目』は後期になると学生が形式に慣れてきて、集中できていないという課題も分かっています。成果と課題を検証しながら、授業の内容や進め方などを改善していきます」（谷口副院長）

課題を自分たちで見つけ、チームでつくり上げていく

初年次教育で育んだアクティブ・ラーナーの素養を、専門教育ではどのようにしてさらに伸ばしているのか。例として、芸術工学部の取り組みを見ていこう。

同学部では、「技術の人間化」を理念に掲げ、人間の特性に応じて技術をどのように変えれば、社会に貢献できるのかを研究している。そのキーワードは、「感性研究」「仕組みのデ



九州大学大学院芸術工学研究院教授
富松 潔 とみまつ・きよし
九州芸術工科大学卒業後、企業勤務、九州芸術工科大学講師等を経て、現職。博士（芸術工学）。



九州大学大学院芸術工学府
伊藤 慎一郎 いとう・しんいちろう
九州大学大学院卒業後、現職。テクニカルスタッフ



九州大学大学院芸術工学府
猪口 陽平 いのぐち・ようへい
九州大学工学部卒業後、大学院は芸術工学研究院に進学。



九州大学大学院芸術工学府
久恒 泰地 ひさつね・たいち
修士課程1年
デザインストラテジー専攻。

ザイン」「イノベーション」だと、芸術工学研究院の富松潔教授は語る。

「本学部の研究の目的は、言うなれば、新しい価値の創造です。そのため、学生は、自分で課題を見つけ、どのような解決策があるのかを考える力をつけていかなければなりません。ですから、授業も、そのような過程を経験できるように工夫しています」

例えば、新しいビジネスモデルの構築がテーマの2年生の科目では、シェアリング・エコノミー（*1）を福岡県で行うとしたら、どのような内容が良いのかを提案する授業を行った。教員は、チームビルディング（*2）やプロトタイプ（*3）など、仕組みのデザインに必要な手法を指導するのみ。学生は、考えるヒントを得るためにシェアリング・エコノミーの事例を調べ、どの分野で何をするのかを自ら考える。そのような形態の授業が学部では多く、修士課程1年の久恒泰地さんは話す。「私が履修したドキュメンタリー製作の授業では、撮りたい人物を見つ

けて承諾を得るところから自分たちで行いました。また、良い映像の撮り方や編集の仕方を教えてくれるわけではなく、だからこそ、発想や感性が鍛えられたと思います」

修士課程2年の猪口陽平さんも、次のように振り返る。

「例えば、プログラミングの授業では、制御文を教わることから始まるのではなく、いきなりテーマが出されて、つくりながら必要な構文を学びます。プログラム構築の考え方も同時に学べる授業でした」

正課外活動でも、授業で学んだことを生かせる場面が多く設けられている。大学院卒業後、テクニカルスタッフを務める伊藤慎一郎さんは芸術工学部の学園祭についてこう語る。「映像やショーなど演目別に100人規模の団体があり、企画・運営はもちろん、衣装や大道具、音楽なども、各分野の学生が分業でつくり発表します。それこそまさに、チームビルディングを経験できる機会です」

九州大学では、初年次教育、専門教育、さらには正課外教育も結びつけて、アクティブ・ラーナーを育てる場をデザインしている。

*1 もの・サービス・場所などを、多くの人と共有・交換して利用する社会的な仕組み。 *2 同一のゴールを目指し、複数のメンバーが個々の能力を最大限に発揮しつつ、一丸となって進んでいくといったチームをまとめる手法。 *3 システム開発の初期段階で、ユーザーの動作確認用として作成する試作品のこと。
*プロフィールは2016年3月時点のものです

「世界に羽ばたく未来創成科学者育成プロジェクト」で 高校生にアクティブ・ラーナーの資質を育む

九州大学では、高校生を対象に大学教員の指導による課題解決型研究を行い、未知の課題に取り組み姿勢や行動力を育てている。

九州大学は、国立研究開発法人科学技術振興機構「グローバルサイエンスキャンパス」に採択され、2014年度から、九州各県と山口県の高校生を対象に「世界に羽ばたく未来創成科学者育成プロジェクト」を行っている。副島雄児副理事は、そのねらいを次のように語る。

図 「世界に羽ばたく未来創成科学者育成プロジェクト」の概要

- **シードコース** (定員 60 人)
 〈知的探求型プログラム〉
 科学的知識の発見・探求を志向した課題研究。化学、物理、生物、数学、地球惑星の 5 コース。
 〈課題探求型プログラム〉
 科学技術による課題解決を志向した課題研究。次世代科学技術探求、未来デザイン、先端バイオ、環境科学の 4 コース。
 - **アドバンストコース** (10 人程度)
 - ・国内外の学会での研究発表
 - ・海外短期派遣研究活動支援
 - ・国際・国内誌への論文発表
 - ・科学技術系コンテストへの参加
- * 同大学の資料を基に編集部で作成

「このプロジェクトは、本学の教育力と最先端の施設・設備をもって、優れた資質を持つ高校生の一人ひとりの能力をさらに伸ばそうという取り組みです。高校生が自ら設定した課題を解決する研究を通して、科学者に必要なアクティブ・ラーナーの資質を育もうとしています」

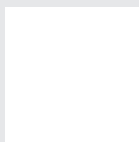
プロジェクトには 2 つのステップがある(図)。「シードコース」(1 年間)には、「知的探求型プログラム」(全 5 コース)、「課題探求型プログラム」(全 4 コース)を用意。いずれも、高校生が月 1、2 回ほど大学を訪れ、大学教員や大学院生の指導の下、実験やセミナーなどを通して学んだり、自分で設定したテーマに沿って研究に取り組んだりする。そして最後に、全コースが一堂に会する発表会を開催。未来の生活を考えるデザインコース担当の牛尼剛聡准教授は、「研究の過程では、正しい結論を導くだけでなく、自由に議論することも大切になっています。ひらめきによる発言が、他者を

刺激し、新しい発想を生むということ、高校生は実感しているようです」と語る。続く、「アドバンストコース」は、シードコース修了生のうち、さらに 1 年間、より高度な研究活動を希望する高校生を支援する。その研究を公表する場も用意。15 年度は、福岡で開かれた国際学会に受講生が参加し、自分の研究を英語で発表し質疑にも対応した。さらに、ベトナム・ハノイを訪れ、現地の高校生と英語で研究内容を発表し合い、意見交換を行った。次世代科学技術探求コース担当の田中将己准教授は、「高校生の研究内容は、学部 4 年生の卒業研究と同様のレベルです。失敗も含めて、『研究とは何か』を経験しています。また、国際学会でも海外研修でも、受講生は英語で堂々と発表して、物怖じしないことに驚きました」と語る。

受講生は様々な刺激を受けている。超伝導体の電流特性を向上させる研究に取り組む、福岡県立修猷館高校 2 年生の松

藤圭亮さんは、本プログラムを通して貴重な体験をしていると、手応えを語る。「初めて実験をした時、1 回で成功すると思っていたらなかなかうまくいかず、きちんとしたデータを取るのに 2 時間以上もかかりました。実験は、9 割が失敗なのだと思いましたが、試行錯誤することが楽しくて、ほかの受講生とアイデアを出し合って研究を進めています」

九州大学では、高校生にアクティブ・ラーナーの資質を育むプログラムを拡充し、高大接続を図っていく考えだ。



福岡県立修猷館高校 2 年生
松藤圭亮
 まつふじ・けいすけ
 プログラム受講生。



九州大学大学院
 工学研究院准教授
田中将己
 たなか・まさき
 コース担当者。



九州大学大学院
 芸術工学研究院准教授
牛尼剛聡
 うしおま・たけとし
 コース担当者。



九州大学副理事(高大連携担当)
副島雄児
 そえじま・ゆうじ
 プロジェクト実施担当者。

* 「世界に羽ばたく未来創成科学者育成プロジェクト」の詳細内容は、右記サイトをご覧ください。 <https://fcsp-qu.org/>

鳥取県で「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」が開催

「故郷の未来はこの手で担う！」 高校生が地方創生のアイデアについて討論

2015年12月、高校生が自らの目線で捉えた地方創生素材について語り合う「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」が、鳥取県立鳥取中央育英高校で行われた。鳥取県、兵庫県、島根県から7つの高校の生徒が一堂に会し、自校がどのように地域を活性化させようとしているのか、その活動の過程で何を果たしたのかなどを発表・討論した。サミット当日の様相をレポートする。

地域を活性化させる活動の 成果と課題を共有するために

鳥取県立鳥取中央育英高校（以下、鳥取中央育英高校）は、地域を支える人材の育成に力を入れ、地域への生徒の愛着を深められるように、地域の課題を考える活動を行っている。柱となるのは、2年生の「総合的な学習の時間」に取り組む「地域探究の時間」で、地域に関するテーマをグループごとに設け、地域の人との交流を通して解決策を探っている。

そこで、同様の活動を積極的に進めている同県や近隣県の高校から生徒を招き、各校が活動の進め方や成果、課題などを共有する「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」（以下、本サミット）を企画した（図1）。

開会のセレモニーを飾ったのは、鳥取中央育英高校2年生有志による郷土の伝統芸能「瀬戸獅子舞」だ。「地域探究の時間」に伝統芸能の継承者不足をテーマにしたグループが、地域の保存会の指導を受けながら練習してきた。その成果を発表することで、生徒の意欲をさらに伸ばすとともに、同校の取り組みを他校に紹介する機会にしようと、本サミットの冒頭で披露させることにした。

次に、同校の横山尚登校長が本サミット実行委員長として、故郷に対する関心や愛着を高校段階で高める必要があると訴えた。続いて、同校の所在地である鳥取県中央部の町、北栄町の松本昭夫町

図1 「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」のプログラム

①開会オープニング

- 郷土芸能「瀬戸獅子舞」披露：
鳥取県立鳥取中央育英高校2年生有志
- サミット実行委員長挨拶：
鳥取県立鳥取中央育英高校 横山尚登校長
- 来賓挨拶：北栄町 松本昭夫町長/
鳥取県教育委員会 山本仁志教育長
- 主催校生徒会長挨拶：
鳥取県立鳥取中央育英高校2年 坂田育斗さん

②サミット参加7校によるプレゼンテーション※発表順

鳥取県立鳥取中央育英高校／鳥取県立岩美高校／鳥取県立倉吉東高校／兵庫県立村岡高校／鳥取県立日野高校／鳥取県立智頭農林高校／島根県立隠岐島前高校

③討論会「高校生が考える地域創造」

- 司会：鳥取大学 大学教育支援機構
教員養成センター 大谷直史准教授
- オブザーバー：島根県教育魅力化特命官 岩本悠氏
- パネリスト：サミット参加7校の代表者各2～3人

④振り返り

来場できなかった島根県立隠岐島前高校を除く、サミット参加6校の生徒全員と来場者による振り返り

*「地域創造ハイスクールサミット2015 in 北栄」の資料を基に編集部で作成

*プロフィールは2016年3月時点のものです

◎鳥取県立鳥取中央育英高校 「地域探究の時間」での取り組みと、それを通して見えてきた地域の良さを発表。例えば、ブドウ農家への取材で、自校の所在地である北栄町は日照量が多く、土地の水はけが良いことなどを学んだ。今後は、特産品や自然環境の良さなどをPRする動画を作成し、ホームページなどで紹介してもらえるように自治体に働きかけていくことを考えている。

◎鳥取県立岩美高校 学校設定科目「ジオパーク(*1)」での活動内容と成果を紹介。例えば、2014年度に行った山陰海岸ジオパーク(*2)でのフィールドワークでは、地域にある美しい自然の魅力を県外の人に訴求するためのパンフレットを、鳥取環境大の研究者や大学生とともに製作した。また、2015年度に行ったインターンシップでは、地域産業への理解を深められた。

◎鳥取県立倉吉東高校 過疎問題について考察し、解決策を提案。過疎地域でインタビュー調査を行ったところ、「生活に

不満を感じている」という人はどの年齢層でも2割に満たなかった。ただ、その一方で、人口流出によって人と人とのつながりが失われている様子が見て取れた。そこで、自分たちが主体的になって人ととのつながりを再生させたいと、自治体とともに地域活動を企画・運営する組織「人輪委員会」を校内に設けようとしている。

◎兵庫県立村岡高校 地域活性化活動を紹介。例えば、注目してもらいたい場所や施設等を詳しく紹介するなど、自分の関心に応じて地図を作り直す「リマップ」活動に取り組む。1年生では、地域の古い町並みを見学することをテーマにした地図などを作製した。3年生では、人物、歴史、自然という3つのテーマごとに、映像を用いて地図を作り直し、地域の魅力を県内外に訴求しようとしている。

◎鳥取県立日野高校 地域活性化活動の内容を紹介。例えば、和歌山大学の学生とともに地域の農村に宿泊し、農業を体験したほか、農村の経済状況や今後の見通しなどについてインタビュー調査を

行った。また、地域の養蜂家の協力を得て校内で蜜蜂を飼育しており、蜂蜜も自分たちで採取。それを用いたドーナツを、地域の業者に依頼して商品化した。地域資源の有効活用になると期待している。

◎鳥取県立智頭農林高校 地域と連携して取り組む授業の内容を紹介。伝統的な農業と景観を保全しようと取り組んでいる棚田の補修活動では、田植えや草刈りも行っている。また、江戸時代に栄えた宿場町・智頭宿の景観を復元するために、地域の人たちの指導の下、格子戸作りに取り組み、地域の老舗の商店や旅館などに納品している。

◎島根県立隠岐島前高校 浜辺のゴミを拾う活動を紹介。拾ったゴミを分類すると、地元から出たと思われるゴミが約7割を占めた。そこで、自分たちが地域の小・中学校で所定の場所にゴミを捨てる習慣を定着させるなどの啓発授業を行う。まずは子どもに働きかけることで、次第に大人の意識も変わり、少しずつだが着実にゴミを減らせると期待している。

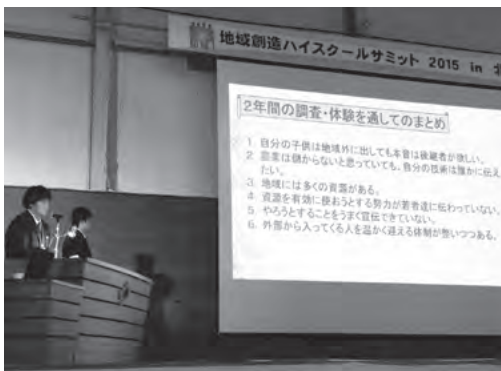


写真1 プレゼンテーションでは、代表グループが1校ずつ登壇し、スライドを用いて自校の取り組み内容を発表。

多彩な試みを通して地域の魅力を発信

本サミットには、2つの主要なイベントがある。

長、同県教育委員会の山本仁志教育長が登壇。本サミットに対する期待を語った。松本町長は、同町が同校と連携して地域活性化に取り組んでいることを述べ、若者の柔軟な発想が地方創生の鍵になると強調した。山本教育長は、他校の取り組みの工夫を知ること、気づきは何倍にもなると話し、今後も活動を継続していつてほしいと呼びかけた。

その1つめは、サミットに参加した7校によるプレゼンテーションで、各校の代表グループが、地域の発展を目指して取り組んでいる活動について発表した(図2・写真1)。参加校の1つ、島根県立隠岐島前高校(以下、隠岐島前高校)は、悪天候の影響で来場できなかったため、インターネットのテレビ電話機能を用いてプレゼンテーションを行った。

どの高校も、地域の魅力を発信する多彩な試みを紹介した。例えば、地域の自然の美しさをまとめたパンフレットを作り、観光客の増加につなげようとする鳥取県立岩美高校、江戸時代に用いられた格子戸を作り、古くから地元にある商店などに納品している鳥取県立智頭農林高校(以下、智頭農林高校)、自校で飼育する蜜蜂から蜂蜜を採取し、その蜂蜜を用いたドーナツを商品化している鳥取県立日野高校といった具合だ。アイデアをただ出すだけでなく、それを実践している高校が多いのは、高校生が真剣に地域の課題と向き合っていることの表れと言えるだろう。

また、取り組みを通して、素晴らしい文化や産業が身近にあることに

*1 美しい地質や貴重な地質を保護するとともに、教育などに生かすことを目的にした自然公園。
*2 京都府、兵庫県、鳥取県にまたがる、面積2458.44km²のジオパーク。リアス式海岸などを観察できる。

図3 討論会で多くの高校生から出された意見（抜粋）

本サミットに参加した感想

- 他校の実践を知り、自校の取り組みをより良くする参考になった。
- 鳥取県立日野高校が、取り組みの中で試作したドーナツを、地域の協力を得て商品化していることに刺激を受けた。自分たちも、地域の農園で栽培したイチゴを用いたタルトを校内で作っているが、それも商品化させたい(鳥取県立岩美高校)。
- 「子どもの行動を通して大人を変える」という鳥取県立隠岐島前高校の姿勢に勇気もらった。自分たちもそうした気持ちで取り組んでいきたい(兵庫県立村岡高校)。
- インタビュー調査を通して幅広い年齢層の意見を聞くという鳥取県立倉吉東高校の手法を、今後は自分たちの取り組みにも取り入れていきたい(鳥取県立鳥取中央育英高校)。 など

地域の課題に向き合って得られたこと

- 地域に対する見方が変わった。取り組みを始める前は「何もない不便な所」という印象だったが、取り組むうちに、名所や古跡があること、豊かな自然があることなどに改めて気づき、地域を誇りに思い、自分の手で発展させたいという気持ちが生まれた。
- 生徒同士はもちろん、地域の人たちとも意見交換を重ねることで、自分の視野が広がったと実感している。
- 地域の人や企業の人といった学校外の大人と交流することで、自分の意見を整理し、分かりやすく伝える力が身についた。
- 行動して初めて見えてくるものがあることや、先入観ではなく、自分の体験によって物事を判断することの重要性を学んだ。
- チーム内で力を合わせれば、1人ではできないような大きなことが実現できると身をもって感じた。 など

気づいたという声も、多くの高校の発表で聞かれた。

論理的に意見を述べ、堂々と議論する生徒たち

本サミットの2つめの主要イベントは、討論会だ。7校の代表者各2〜3人に、司会として鳥取大学大学院教育支援機構教員養成センターの大

谷直史^{たし}准教授、オブザーバーとして鳥根県教育魅力化特命官の岩本悠^{ゆう}氏^しが加わり、「高校生が考える地域創造」というテーマで話し合った(図3)。

本サミットに対する感想や、地域の課題に向き合って得られたことを、どの生徒も具体的に挙げたほか、生徒同士が取り組みに関する質疑応答を活発に行った。例えば、智頭農林高校の格子戸作りに対しては、鳥取

県立倉吉東高校の生徒が「地域貢献にどのように結びつくのか」と問いかけた。それに対し、智頭農林高校の生徒は「格子戸を設置した家屋を増やし、江戸時代の宿場町の面影を再現することで、観光地としての魅力を高めたい。そうなれば観光客が増え、地域活性化につながると考えている」と答えた。地域の課題に向き合って得られたことの1つとして、多くの生徒が「自分の意見を伝える力を身につけられたこと」を挙げたが、それは、実際に質疑応答で論理的に考えを述べ合う生徒の姿に、はつきり表れていたと言える。

さらに、他校の活動に対する提案も行われた。例えば、鳥取中央育英高校のプレゼンテーションでは、研究機関の調査データを用い、鳥取県の住民の幸福度に言及していた。それについて兵庫県立村岡高校の生徒は、「地域の人の幸福度を独自に調べると、面白いのではないかと勧めた。

また、討論会の途中には、鳥取県の平井伸治^{しんじ}知事が来場し、「高校生一人ひとりが、地域の未来を変える力を秘めている」と、生徒を激励する一幕もあった。本サミットに寄せる

同県の期待の大きさがうかがえる。

サミットで何を学んだのかを、生徒が来場者とともに検討

討論会の後には、本サミットの振り返りが行われた(写真2)。それは、当日に得た気づきを、今後の活動にしっかり生かせるようにするためだ。

岩本氏の司会により、隠岐島前高校の生徒を除く、会場にいる生徒全員と来場者がグループになり、①本サミットで学んだこと、②本サミットの課題、③課題の改善策を話し合った。①については、「地域活性化についての様々な取り組みが分かったこ

写真2 振り返りでは、生徒が自分から来場者に声をかけてグループをつくり、積極的に自分の考えを述べていた。

と」②については、「プレゼンテーションも討論会も、テーマが広くなりすぎ、論点がややぼやけてしまったこと」、③については、「テーマをもっと絞ること」など、様々な意見が挙げられた。岩本氏は、地域活性化に不可欠な要素として、主体的な行動力、課題発見・解決力、コミュニケーション能力の3つを挙げ、それらを伸ばすためには、多様な人たちとの交流が重要だと強調。交流の輪を他地域に広げることで、さらに学びを豊かにしてほしいと訴えた。

最後に、討論会に参加した生徒が、討論の内容を踏まえて作成した本サミットの「共同アピール」を発表した。それは3つの宣言から成り、「私たちは、高校生の視点から地域と連携して地域の現状や課題を探究し、地域創造のために提言していきます」「私たちは、『地域創造ハイスクールサミット』を今後も協力して開催し、意見交換していきます」「私たちは、地域創造の志を共有する仲間を全国に求めていきます」と、決意を力強く述べていた。今後も、「地域創造ハイスクールサミット」の進展を注視していきたい。

今後は生徒が主体となって開催して欲しい



鳥取県立鳥取中央育英高校 校長
横山 尚登
よこやま・ひさと
教職歴37年。同校に赴任して2年目。

故郷は、誰にとつてもかけがえないものです。ただ、あまりにも身近な存在であるためか、その良さに気づきにくい面があります。都市部の華やかさに憧れやすい地方の子どもであれば、なおさらです。また、地方の高校では、多くの生徒を都市部の大学などに送り出しますから、高校段階で生徒を故郷としっかり向き合わせてこそ、地域を担う人材が育てられると、私は考えています。

そこで、本校に赴任した14年度に、地域と連携しながら、地域について探究し、考える取り組みを始めました。地方には、少子高齢化や過疎化など、容易には解決策が見いだせない課題が山積しています。それは、どの生徒も探究活動を通して実感するでしょう。ニュースなどで漠然と知っていた社会問題が、自分の生まれ育った地域で実際に進行していることを知れば、「自分たちの手で何とかしよ

う」という意欲につながると考えました。

2年生に「地域探究の時間」を設けるなど、取り組みが本格化した15年度には、他校との意見交換の場をつくりたいと思うようになりました。地域と連携した取り組みを介し、地域に貢献しようとしている高校は、全国にたくさんありますが、特殊な環境での事例も少なくありません。全国で取り組みの成果と課題を共有し、一般化することこそ、地方創生への大きな一歩となるでしょう。それが、本サミットを本校が主催した理由です。前例があまりない取り組みなので、手探りで準備を進めてきました。先生方が、他校の活動の視察などを積極的に行ってくれたからこそ、実現できたと思います。

本サミットの討論会では、他校の取り組みから刺激を受けたという声や、参加校の多くの生徒から聞かれました。今回得た気づきを基に、生徒が主体的に工夫すれば、各校の活動はもっと充実していくでしょう。そのため、本サミットを継続していく意義は大きいと思います。最後に発表された3つの宣言にあつたように、今後は生徒が主体となって、進んで計画し、運営して欲しいと考えています。

生徒が自分の気づきを後輩に引き継げるように



鳥取県立鳥取中央育英高校 企画研修部主任
田中 暁宏
たなか・あきひろ
教職歴21年。同校に赴任して5年目。

本校の15年度の「地域探究の時間」では、2年生が郷土芸能や福祉などの25のテーマについて、地域の人と交流しながら課題を見つけ、解決策を探りました。その過程で、自分で考えることの面白さにどの生徒も気づき、知的好奇心を高めていったようです。そのため、教科学習の意欲向上にもつながりました。

知らない人に対してでも堂々と自分の意見が言えるようになったことは、取り組みの大きな成果です。それは、「地域探究の時間」の集大成と位置づけていた本サミットでも、発揮されたと思います。ただ、地域を活性化させるには、アイデアをもっと実践に移し、現実的な提案をしていく必要があります。そのため、教師間はもちろん、生徒間でも、自分たちの気づきや学びを下の学年にしっかりと引き継ぎ、取り組みをさらに発展させていきたいと考えています。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

高校生が英語力、論理的思考力を競う！

県の英語教育の底上げを目指し、山梨県で初の英語ディベート大会を開催

2016年2月、山梨県立甲府昭和高校において、山梨県で初めての全県規模となるディベート大会「Yamanashi Cup 2015」が開催された。山梨県高等学校教育研究会の英語部会が中心となり、先進県の助言を受けながら、2年前から準備を進めてきた。県立・私立計10校、73人の高校生ディベーターが参加した大会当日の様態と、大会開催に至る道のりをレポートする。

2年間をかけてディベートとは何かを知る

2016年2月、「Yamanashi Cup 2015」の開会式会場の山梨県立甲府昭和高校のホールは熱気にあふれていた。出場する高校生や引率の教師、応援に駆けつけたクラスメート、さらには県内の中学・高校の英語教師や中学生ら、多くの観客が詰めかけていた(写真1)。

この大会は、16年度に実施予定の山梨県高校生英語ディベート大会の本大会に向けた「プレ大会」として実施され、山梨県内の高校10校、高

校生73人が出場した。本大会は、毎年12月に行われるHEnDA主催の「全国高校生英語ディベート大会」(*)の山梨県予選を兼ねて行われる。

今回のプレ大会の目的は、運営ノウハウを蓄積し、本大会の質をより高めると同時に、学校間での生徒・教師の交流、指導力の向上を進め、県全体での英語ディベートの認知を高め、英語教育の底上げを図ることだ。

県内初のディベート大会に向けた道のりは、14年度に始まった。当時の阿部邦彦山梨県高等学校教育研究会英語部会会長(現山梨県教育委員会教育長)の発案を受けて、同年6月、英語部会総会で2年後の大会実施が

決議された。大会に企画段階からかわる英語部会の池谷佐知子副会長(葦崎高校教頭)は、こう語る。

「ディベートは英語の4技能を総合的に育成できる活動であり、CAN-DOリストの到達目標の1つでもあります。ディベートを県内に広めることで、生徒の英語力の向上を図りたいと考えました」

準備は、教師自身がディベートを知ることから始まった。既に英語ディベート大会を開催し、その指導にあたって近隣の英語教師や、英語教育を専門とする大学教員らをして講演会やワークショップを実施。ディベートの魅力や教育効果、指導

図1 「Yamanashi Cup 2015」概要

- **論題** 日本は、法的な成人年齢を18歳に引き下げるべきである。
Japan should lower the age of adulthood to 18.
- **出場校** 県立 葦崎高校、甲府西高校、甲府南高校、甲府昭和高校、都留高校、都留興譲館高校、吉田高校
私立 山梨英和中学校・高校、駿台甲府高校、山梨学院大学附属高校
- **ジャッジ(審査員)** 神田外語大学講師・田島慎朗、長野県松本県ヶ丘高校教諭・池上博、長野県屋代高校教諭・ジョシュア・コピトスキー、埼玉県立浦和北高校教諭・丸橋洋之、さいたま市立浦和高校教諭・浜野清澄

*詳しくは全国高校英語ディベート連盟(HEnDA)のウェブサイトをご覧ください。
<http://henda.global/>

法などを学び、各校は授業に積極的に
にディベートを取り入れていった。

早速、実戦にも参加。14年12月、
山梨県立谷村工業高校（現山梨県立
都留興譲館高校）が山梨県勢として
は初めて「全国高校生英語デイベ
ート大会」に出場、翌年2月、山梨県
立甲府昭和高校が「高校生英語デイ
ベート大会ウインターカップ」に出
場し、ディベートを堂々と披露する
など、徐々に機運が高まっていった。

プレ大会の開催は、15年6月の英
語部会総会で決定。前年に引き続き、
講演会などを開き、同年10月には、
山梨県立吉田高校が「全国高校生英
語デイベート大会」甲信越ブロック
大会に参加して善戦した。それらの



山梨県立韮崎高校
教頭
池谷 知子
いけや・ちこ
教職歴31年。同校に赴
任して1年目。山梨県
高等学校教育研究会英
語部会副会長。



山梨県立吉田高校
教職歴26年。同校に赴
任して5年目。山梨県
英語デイベート大会事
務局長。
上村 泰子
かみむら・やすこ

経験を英語部会の中で共有する中で、
教師・生徒の間にディベートを特別
なものとする意識は薄らいでいった。

埼玉県、長野県など近隣の 先進県からノウハウを吸収

大会準備は、吉田高校が事務局（英
語部会会長・坂本明大校長、同副会長・
相沢季里教頭）、甲府昭和高校（同副
会長・三浦浩一教頭）と韮崎高校が
協力校となり、企画から開催まで英
語部会が中心となつて進めた。

「英語部会が、県教育委員会、県教
育センターと連携を取りながら準備
を進めることで、公立・私立を問わ
ず県内全ての高校が、研修や大会に
かかわる情報を共有することが容易
になりました。大会の意図や重要性
についても学校間で目線合わせがで
きたことが、スムーズな運営につな
がったと思います」（池谷副会長）
県主催の大会としては後発だった
ことも幸いした。山梨県は、埼玉県
や長野県などのディベート先進県に
隣接しているため、他校の視察や講
師の招聘が比較的容易に進み、その
ノウハウを学ぶことができた。プレ



写真1 会場には、出場者のほかに、応援団のクラスメート、英語に関心が高い中学校教師や中学生も集まった。

大会でも、5人のジャッジ（図1）の
うち4人は両県から英語デイベ
ート指導の第一人者を招き、試合の判定
と講評にあたってもらい、大学から
もジャッジを招くことで、大会の質
を担保できたと、池谷副会長は言う。
「ジャッジの先生を始め、先進県の
先生方の協力があつたからこそ開催
できました。これからディベート大
会を実施する場合は、先進県の交流
の輪に入り、ノウハウを吸収してい
くことが鍵ではないでしょうか」

生徒たちの変化が 教師の不安を払しょく

もちろん、実施に至るまでの道の

りは決して平たんではなかった。何
よりも懸念されたのは教師の負担だ。
「県を挙げての大会となると、準備
や生徒への指導に時間がかかります。
その上、私たち教師自身がデイベ
ートに慣れていないこともあり、大会
出場をためらう大きな要因になつて
いました」（池谷副会長）

また、同県では毎年、英語のスピー
チ・コンテストとレシテーション・
コンテストを実施しており、各校が
2年ごとに幹事校となる。その運営・
指導に加えて、ディベート大会まで
行うのは厳しいという声も少なくな
かった。そうした声に対しては、2
年間という時間をかけて準備や勉強
会を重ねていき、少しずつ理解を得
ていった。大会運営の責任者である
事務局長の上村泰子先生（吉田高校）
も、当初は不安を抱える1人だった。
「英語で考えて、討論するといふこ
とが、本校の生徒にできるのか、大
会の実施が決まった後も心配でした。
しかし、先進県の試合を見学し、生
き生きと討論する生徒の姿を見て、
考えが変わりました。同じ高校生な
のだから、山梨の高校生にもできる
はず。何よりも、自分の生徒に同じ

*プロフィールは2016年3月時点のものです

体験をさせたいという思いが、私自身のモチベーションになりました」

上村先生がプレ大会の成功を確信したのは、吉田高校のESS（英会話部）が甲信越ブロック大会に参加した時だ。不安を口にしながら会場入りした生徒たちが、帰りの車中では興奮した面持ちで大会の感想を英語で語り合い、学校に到着するまで明るい会話が途切れなかったという。

「初めての公式戦で12チーム中6位という成績を残し、『自分たちもやればできるんだ』という手応えや充実感を得たでしょう。ディベートへの意欲が高まっただけでなく、大会を通して生徒の気持ちが団結していく様子を見て、やって良かったと心の底から思いました」（上村先生）

いよいよ迎えた本番 10校73人の生徒が敢闘

プレ大会には10校が出場し、1校につき3試合が行われた（写真2）。試合は全国大会予選と同じルールで進められ、チームの勝ち点、対戦相手の勝敗、英語力を見るコミュニケーション・ポイントを総合して順位が



写真2 試合は肯定側（Affirmative Side）と否定側（Negative Side）に分かれ、「立論」「アタック」「ディフェンス」「総括」の4段階でスピーチを行い、「立論」「アタック」では質疑応答も行う。

決まる。全試合に勝っても優勝できるとは限らず、ジャッジの採点が確定するまで順位の方は分からない。

ディベートの論題は、「日本は、法的な成人年齢を18歳に引き下げるべきである」（プレ大会であるため、過去の全国大会の論題を使った）。出場登録できるのは1校8人までで、試合に出られるのはそのうち3〜4人だ。3試合で全てのチームが肯定側・否定側の両方の立場を経験するように組み合わせられた。既に県外で複数の試合に出場した経験のあるチームから、ディベートに初挑戦というチームまで、各校のレベルは様々だった。チーム内でメモを回して情報をタイ

写真3 次のスピーチの作戦を練るために、相手のスピーチの内容や自分の考えを付せんに書き、チーム内で共有する姿も見られた。



写真4 試合後にはジャッジが試合内容を講評し、ディベートに勝つためのポイントを伝授。それを熱心に書き取る生徒もいた。

ムリーに共有するチームもあれば（写真3）、言葉に詰まって沈黙が続くチームもあったが、自分の考えをきちんと伝えようとする姿勢、相手の主張に耳を傾けるマナーの良さは、どのチームにも共通していた。

毎回の試合後には、ジャッジが各チーム1人の「ベストディベーター」を発表し、試合を講評した（写真4）。「エビデンスを示さなければ、それは単なる意見」「質問は次のアタックにつながるように誘導しよう」といった、全国大会を見据えた実戦的なアドバイスがなされ、出場した生徒はもちろん、試合を見守っていた教師や生徒たちも熱心に耳を傾けていた。

9時に第1試合が始まり、14時頃に全試合が終了。参加者全員がホールに集まり、ジャッジ一人ひとりが講評を述べた後、阿部教育長が登壇し、「山梨県の英語教育のエポックメイキングの日になった」と大会の成功を祝った。最後に、試合結果が発表され、優勝は吉田高校、2位は甲府西高校、3位は甲府南高校に決まり、3チームが登壇しての表彰式が実施され、大会は幕を閉じた。

大会運営体制の整備と 参加校の増加が課題

初めてのディベート大会は成功裏

勝因は、徹底した事前準備とメンバーのチームワーク

私たちは、ESSの有志で、2015年度に発足したチームです。今回は、甲信越ブロック大会に続く、2回目の公式戦でした。山梨県で初めて開催されたディベート大会で優勝できて、光栄です。

勝因は、事前準備がしっかりできたことだと思います。情報収集はチーム全員で行い、必ず共有して頭にたたき込むようにしました。また、自分たちの論に穴はないか、あるいは相手の論を予想し、どのようにアタックするのか、本番を想定して討論の中身を徹底的に検討しました。

一度でき上がったコンストラクティブ・スピーチの原稿を、丸ごと書き直したこともありました。全員が納得した論に基づいて、メンバーの1人が原稿を書きましたが、さらに検討した結果、主張が抽象的で、根拠に乏しいことに気づき、別の論を立てることになったのです。論を書いた本人はもちろん、メンバー全員ショックを受けましたが、「勝つためには必要なこと」と納得し、励まし合いながら準備を続けました。

本番では、自分たちの考えをなかなか英語で表現できないことにもどかしさを感じる場面もありましたが、チームワークでカバーできました。相手の質問やアタ

クを聞いている間に、メンバー各自が考えたことなどを付せん

に書いて回し、全員で共有することで、ディ

フェンスやサマリーがスムーズにできて、ジャッジに良い印象を与えられたと思います。ディベートの魅力は、英語力だけでなく論理的思考力や表現力も身につくことだと思います。そのような力は、社会に出た後も、プレゼンテーションや交渉の場面で生きてくるはず。また、ディベートに取り組んだことで、国語や数学などの他教科の学習方法も変わりました。教科書を読みながら、「なぜだろう」「本当にそうなのか」というように深く考える習慣が付き、批判的な読み方や論理的なアプローチができるようになりました。

次の目標は、2016年度の県大会で優勝し、全国大会に出場して好成績を残すことです。これからもメンバーで力を合わせて、スキルを磨いていきたいと思っています。

に終わり、大会運営のノウハウ獲得以上の大きな成果が得られた。何よりの成果は、大会の準備や研修を通して、教師間にディベートに対する理解が広がり、多くの学校が研究発表会や公開授業でディベートを取り上げるようになったことだ。それに伴い、他教科にもディベートの重要性が認知され、国語や地歴・公民でディベートを行うようになった学校もあるという。「生徒を大会に出場させられるレベルの指導はまだできていないけれども、授業で実践してみよう」という教師も増えており、所期の目的が達成されつつあります。自校の生徒は大会に不参加でも、大会運営に協力してくれた教師もいました」と、池谷副会長は手応えを述べる。

今後に向けた課題も浮き彫りになった。その1つが、各校の負担の軽減だ。今回のプレ大会は、他のコンクールと同様に、英語部会の事務局となつている学校が幹事校として運営を主導した。今後は、英語部会の事務局とは別にディベート大会独自の事務局を設けて、1大会につき3校が幹事校となる共同運営体制を検討している。そのため、どの学校が幹事校になつても運営に支障が出ないよう、汎用性の高い運営マニュアルを作成する予定だ。いかに参加校を増やしていくかという点も、大きな課題だ。「英語力の高い学校でなければ大会に出場できないと考えている教師は少なくありません。英語ディベートは一見難しそうに見えますが、使う言葉や発言時のフォーマットがある程度決まっているので、準備さえしっかりできていれば、どの学力層の生徒でも参加できます。情報交換や研修会の機会を設けるなどして、ディベートに対する理解をさらに深め、1校でも多くの学校に参加していただけるよう、工夫を重ねていきたいと考えています」(上村先生)

山梨県は、ディベートを「ルールのあるアクティブ・ラーニング」とも捉え、各教科だけでなく、学校での教育活動全体に応用できると考えて推進しているという。16年春には、全国大会予選となる本大会の準備が始まる。プレ大会の総括を基にまとめた改善点を英語部会で共有した上で、6月の英語部会総会で本大会の詳細を固める予定だ。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

教職員全体で教育のデザインに取り組み

「活動を有機的に結びつける」という課題にどう取り組めばよいのかを考えていたところ、2月号の特集を読み、生徒自身に教育活動の一つひとつに大きなつながりがあると感じてもらうことが大切であると教わった。そのトータルデザインは、管理職任せにするのではなく、教職員全体でつくり上げていくという姿勢を学校内の雰囲気として築くことにまずは着手したいと思った。

〔東京都・私立東京農業大学第一高校・小堀健二〕

積極的な校外活動が

多様な考えや価値観を育む

2月号「ハートをこがせ!」の愛知県立一宮高校の地学部の活動は、生徒の活動が学校内にとどまらず、他校と連携したり、研究会に参加したりと、積極的に外に出て行こうとしている点が素晴らしいと思った。運動部は年間を通じて大会があり、外に出る機会が多いが、文化部の多くは発表の機会が少なく、活動の場が限定されてしまいがちなので、多様な考えや価値観を育む上でもそのような活動が広がると良いと思う。

〔茨城県立水戸第一高校・川久保典昭〕

生徒の知識・理解をアウトプットする機会を増やす

2月号「指導変革の軌跡」の愛知県立江南高校は、土曜教室で様々な講座を設けて、アウトプットする機会を確保している点が参考になった。本校でも、知識・理解の深化と定着

Reader's VIEW

Volume **1**

読者のへーじ

読者の先生方からのご意見を紹介します

確認のためのアウトプットの機会の必要性を痛感している。また、放課後に補習を行っており、部活動に顧問がなかなか行けない状況も生じているので、部活動に活気を取り戻し、進学実績も向上させている取り組みも参考になった。

〔和歌山県・匿名希望〕

教師と保護者の建設的な議論が、生徒の成長につながる

2月号の「半歩未来を考える教育オピニオン」を読み、学校も保護者も「基本的に目指す方向性は同じ」という言葉に実に共感した。学力だけではなく、社会人として立派に活躍してほしいと教育活動に取り組んでいるのが私たち高校教師であり、その方向性と異なる保護者がいるはずはない。目的は共通でもその実現のための手段や方法、レベルについて齟齬があるのは当然のことで、むしろそれを建設的な議論によって昇華することができれば、どれほど生徒の成長につながるのだろうか。学校と保護者が今以上に協働できる環境を整備していきたいものである。

〔愛知県立日進西高校・野々山新〕

教師川柳

夢を持って！声かけ自分はくじを買う

富山県立富山高校・樋掛雅則

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良！指導ツール ピフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎「VIEW'S REPORT」でご紹介した山梨県の英語ディベート大会で優勝した山梨県立吉田高校は、私の母校です。優勝インタビューで、はきはきと答える後輩たちに頼もしさを感じるとともに、ディベート大会に向けて主体的に取り組んできたことが伝わってきました。それは、どの参加校の生徒も同じだったに違いありません。今号の特集でお伝えした高校生の主体性の向上を、この取材でも垣間見られたような気がします。今年度も、次なるステージへ進もうとしている高校教育について、先生方とともに考えてまいりたいと思います。よろしくお願いたします。(柏木)

VIEW21 4月号 Vol.1

2016年4月8日発行

発行人 山崎昌樹
 編集人 春名啓紀
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
 印刷製本 (株)協同プレス
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 中丸 満、二宮良太
 撮影協力 荒川 潤、川上一生、谷口 哲、南 弘幸、ヤマグチイック

VIEW21編集部
 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2016

VIEW21

2016
June
6月
Volume 2

次号は
6月13日発行(予定)
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師と生徒の肖像

思いを託す

表紙の学校 千葉県立長生高校 関 剛史^{ちやうせい たけし}先生

母校の教壇に立って15年目という関剛史先生。実は同校への赴任は今回が2度目だ。最初の赴任は18年前。母校の飛躍に貢献したいと、がむしゃらに生徒と向き合った。進路指導部長となつてからは、全国の教員が集まる場にも積極的に足を運び、他校の指導状況を聞いて回った。「自分たちに足りないものは何かと指導を見つめ直し、良いと感じた取り組みはすぐに実践しました」と振り返る。それは、生徒の進路希望に応える原動力となり、進学実績は好調を維持し続けた。

しかし、4年前に再び赴任すると、学校の状況は少し様変わりしていた。スーパーサイエンスハイスクールの指定校として指導が拡充し、生徒の気質も変化していたのだ。進路行事や課外授業の実施状況などから、生徒の実態と指導がかみ合っていないのではないかと、関先生は感じた。「かつては量を重視した指導で生徒を引っ張ることができましたが、従来と同じ指導では、今の生徒の力を十分に引き出すことは難しくなっています。指導の質的転換が必要でした」。

数十年前のかつての自分がそうだったように、生徒はこの学校に憧れ、入学してくる。だから、どんな環境の変化があつたとしても、地域の拠点校であり続けなければならない——。その信念が関先生を突き動かす。進路行事の内容、模試の実施回数、面談の体制などを再び見直し、新たな指導をつくり上げようと奔走する。一緒に取り組む後輩教師の中には、かつて自分が教えた元生徒もいる。関先生と同じような思いで教壇に立つ後輩たちに、全てを託す。

「私がここで学んだ日々が今につながっているように、今、教えている生徒が将来の母校を動かしていくかもしれません。だからこそ、全力を尽くしたいと思います」。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume1 2016年4月号

2016年4月8日発行/通巻第357号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2016お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17